

エ+344300

18-550



幻術

附

神

と

幽

霊

の理姿

全

古依然たり唯觀察の廣狹に依りて斯の如く感ず
るのみ

神秘なる靈界のこと未だ俄に世の俗見を以て
斷すへからを機先の觸るゝ處光明を放ち靈焰を
發す蓋し此間の消息の素心を以て之を觀するに
あらされり天造の眞趣は終に之を解することを
得ざるあり

此編中記述する處元と心靈機微の作用に属す故
に其の所説時に怪力乱神を語るに似たる者あら
んと雖とも著者固より好て奇を談する者にあら
す唯虚心を以て觀察せる所のまゝを記せしのみ

此書か世の學者の爲めに容れられさることば著
者の豫め期する所にして又深く之を望む者にあ
らず唯幸に實踐の士ありて同感を表せらるゝに
逢はく著者の幸何物か之に過ん記して以て序文
に代ふ

明治廿七年十二月

長春閣主人識

目次

總論	一
幻術の由來	二
古代幻術の方法	十五
幻術の實驗	十九
狐狸の妖術	二十一
神	二十九
日本上代の神の靈物あらす	四十
幽靈	四十五
非幽靈	六十八
靈飛 生靈死靈	九十二
夢及奇夢	九十九
斷食	百十四
十四日間斷食の試驗	百二十八
幻術の應用	百四十二
結論	百五十一
	百五十八

幻術の理法 附神と幽靈

近藤嘉三著



半夜燈前に妖怪を懸すれハ窓外の芭蕉も幽鬼の來り襲ふかと疑はる
 況んや亦心力平均の作用ハ時に物象の轉化と相關係するものあるに
 於ておや機の動く處轉變窮りあることなし
 心機の活動ハ猶磁氣の流行するか如し感すれハ動き動けは則ち變じ
 其の現象甚た奇なるか如しと雖も亦是れ物力二者の關係たるに過ぎ
 ず水石の激えて聲をかし楓葉の霜に逢ふて色を變ずると何ぞ擇ん然
 れども心靈の活動ハ其の機能の玄妙あるか爲めに古來多く之を妖怪
 とおし不思議となす

抑怪談の起り奇説の行はるゝの固と其事由の明らかあらざるに由る故に若し之を分拆解剖して其の由來を求め道理を究むれば其の妖怪の亦妖怪ならざるに至んのみ
蓋し人の心性の悟性覺性等に属する作用の他に更に一種特異なる靈光を放つ者なり之を心靈の感通作用と云ふ即ち甲乙彼我の間に心力の感傳波及せるの機能にして之に由り以て他人の心身を制し又我が心身の他人の意思に制せらるゝの妙機あり換言すれば五官器に由らんとして已れの心力を他人に通し他人の心力を已に感受して種々の行為をおす者なり此妙力の獨り人類相互の間に感傳するのみならず廣く宇宙の萬象に通して之を感格連貫することを得故に之を稱して心力の平均作用と云ふも亦可あり

此の心力感通の作用の精神作用中の殊に靈妙奇異なる者にして全く五識の外に卓立せる者なれば其の機能の隱約機微なるの素より論を俟たず之を他の五官機能に比するに蓋し日を同ふえて語るへからざる者あり故に之を知ること頗る難く之を説明せるの又更に難き
古來の史上に証明せる處の多くの事實及び各人が往々實地に見聞せる所に由て感通即ち心力平均ある事實の髓に存在せることを知ると雖ども未だ其の感通の如何おして起り如何おして行ゆるかの疑問の未だ何人の口よりも之を解説せられたるを聞かす多くの之を奇怪不可思議の暗黒界に投し去るおあらされの理外の理法外の法とて不可知的事柄なりとなすに過ぎず
事實にの必ず之に隨伴する所の道理の伏在する事と言ふまでもなし故に茲に不思議なるか如く見ゆる事實ありとせるも必ず其の由て然るの道理を裏面に伏在せるものにして未だ決して道理に由らざるの

事實あることなし之を如何そ普通の道理を以て解釋し得へからずと
 おすを得ん正法に不思議なく道理に二途をせし世の妖怪を研究する
 もの動もすれへ己れの智力に解すへからざるの現象に逢て此の理外
 の理あり彼の普通の道理に由て解釋すへからざる事柄ありと絶叫す
 るの偶々以て自己の識量の狭きを示すも過ぎず
 感通も古へ之を不思議の一に數へられたりし然れども余の體に之
 を一種の心力作用ありと思爲して之に關する種々の試験をなし又世
 人が見聞したりと云ふ處の事實に由て聊か之を茲に記さん然れども
 固と是れ無形の理法に屬するもの或の謬見誤想なきを保す可らず只
 記して以て世の同志の徒に示すのみ若し幸に其の誤謬を擧げて之を
 正すを得ば著者の幸ひ何物か之にすぎん

感通の固と心力の波動作用は由りて起る心力の波動の腦髓細胞の作

用の轉えて精神作用も變化するに由りて起る即ち張力の變えて活力
 となるの際に起る處の一種の振動作用に基く者ならん

人の精神作用の大腦表皮に存する處の灰白質細胞に由て發す即ち
 灰白細胞作用の變して精神となる者にえて精神作用の當體の腦髓
 細胞に外ならず然れども精神作用の腦髓作用にほらすめて腦髓作
 用亦精神作用にあらざるあり

凡て心力の感通の一定せる目的の場所に到達するにあらされり其の
 作用を現せざる者にして例之の光線及び音響波動の反射の其の燃焼
 點又の反響を聴取せ得べき中心點にあらされり反響を聴取し又の物
 体を燃焼せ能はざるか如し而して其の燃焼點の以内たると以外たる
 とを問はず他の位置にありて何等の影響を感せざるか如く心力の
 波動も亦其の目的以外の人に仮令幾許の距離を隔つるも更に感通

を妨げざるを共に何等の影響をも及ぼすことなし
 心力の機動波及の固より機微隱約なり又幽幻如影なり五識を以て之
 を知ることを能はざるを以て彼我相隔絶せるの間に其の機動を波及す
 ること、或の之を疑ふものあるべしと雖も彼の避雷針の電氣を吸収
 せし磁氣の鉄片を吸引することを知らず蓋し思ひ半は過ん
 感通の之を區別して施感受感とせず施感との感通せしめんとするの
 心力にして受感とは其の心力を感受するを云ふ而して其の機能を感
 通と云ひ感通の結果を感應と云ふ今試に之を論せんに感應の有無と
 多少の施感力の強弱如何に比例するものに於て施感の心力愈々強け
 れば感應從て著しく且つ速に之に反して其の心力微弱なるときは感
 應遲緩あるが或の全く感應あることなし心力の強弱との或る目的を
 達せんとす又の達を得べしと信する所の信仰心又の願望心の強弱多

寡を云ふあり精神一到何事不成思ふ事は成を得るものとの蓋し此の
 理に外ならず

受感者が施感者の心力を感受するの身体中何の部分よりするもの
 なるやは明らかに之を知ること難しと雖も恐くは大腦及び小腦よ
 りするにあらざるか若し然りとせば大腦よりの意識上の心力を
 感受し其小腦よりするもの、身体運動上に關するものを感受する
 べし例之の水を以て牛乳なりと信せしめ熱湯を以て酒なりと思
 爲せしむるか如きは大腦表皮の細胞之を感受し又四肢の運動行爲
 等に關する事、之を小腦より感受するもの、あらん是れ大腦は意識
 の府にして小腦の運動の中心なればなり、刺客某曾て余に告て曰く
 凡そ戰場に劍戟相撃つや敵の劍鋒の將に我頭上に落ち來らんとす
 る時全身先づ戰慄するか如き感あり而して其の戰慄は始め前頭部

に起りて忽ち全身に及ぶを覺ゆ又魔物即ち狐狸の類に突然出逢ひたるときも同じく全身に戰慄惡寒を感ず然れども此の時の後頭部の邊より氷を灌かるゝか如く寒戰するを覺ふ是れ劍法の秘傳に載する處にして又屢々實踐せる所ありと此の一小話亦聊か前説の參考とあすに足らん

白刃を以て戰場に相撃つや相互の心力の共に敵を倒さんとするに
あるを以て心力充實して容易に之を斫ること能はずと雖も若し敵
手にして心力の充實を欠き寸隙と雖も其の乗すへきの機あるに逢
へば流星一下直に之を斫ることを得んこの虚實一瞬の間は殆んど
間髪を容れざる咄嗟の間にして筆舌の容易に評することを許さず
る所あり夫れ然り然れども此の際に於ける劍鋒の上下は一に心力
と相伴はざるべからば故に劍鋒の下ると共に心力先つ敵の心身を

制して心力劍鋒相映つて敵身を斬る其の心力の前にも云へるか如
く此際大脳より感受せらるゝならん

狐狸の類か人を魅するや其の意恐く人の心力の虚に乗せて其の
心力を注入附翹し心身を制して運動左右して人類を玩弄するにあ
るべきか故に狐狸に魅せられたるときは其の人の大脳作用休止し
て心力空虚となり恰も偶像に狐狸の心力を附翹したるに異ならず
即ち其の間は人体孤心なりと云ふも不可なきか如し此の場合に
狐狸の心力を小脳より感受するものなるか

凡そ心力を感受する際の受感者の精神作用休止して全く無爲無我の
際に在るものとす無爲無我の時即ち無想無念の境遇にして苦痛を
く又快樂なきの時なり實にこれ心靈本來の面目にして全く物我を忘
却したるの時なり既に物と我とを忘る其の爛々たること新磨の明鏡

の如く又清き水の如し故に物ありて之に臨めり忽ち之を現し影ありて之に向へり直ちに之を寫す必ずしも其のものも月と花とを論せざるなり又之を譬ふれり静穩なる水の僅少の衝動に由ても忽ち之を傳へて水面幾多の皺紋を畫くか如し然るに若しこれに反して受感者の腦中僅微の精神作用あるも其の間他の心力の之に竄入するの機なきを以て決して其の心力波動を感受せることなし

心力の前來縷陳せるか如き狀に由て感通傳播せるものにして既に一たび心力の感通せるに至れり受感者の全く自己の精神を忘失去て心力其の作用を逞ふすることを得ざるものなり故に己れの思ひさる行為をなし又己れの知らざる事柄を語り其言語行為の悉く施感者の心思に従ふ者にして恰も一時施感者に憑附せられたるか如き觀あり例之の其の心中に更に知らずして或は手を動かしたり或は足を擧げたり

又奇異ある音聲を發して種々の事を語り甚まき未だ曾て見聞せざる所の風土景況を語り未だ學ばざるの文書を読み等彼の催眠術を施されたる人か術者の命に従ふに似たる現象を呈するか如し此の如きは一見頗る不可思議なるか如しと雖も是れ決して不可思議なるにあらず又奇怪あるにもあらず悉く皆其の裏面に由て然るの道理を隨伴せるものあり更に之よりも不可思議あるか如きは心力を以て他人の身体の組織機能を變改轉換することは是れあり祈禱に由て疾病を治療せしめ呪咀に由て人を殺すの類皆是れなり

以上記する所の頗る奇怪なる現象なるか如しと雖も彼の貴人強者等の面前に於て身体壓伏せらるるか如きを感じ恐怖せる時に心身萎縮して不覺の行為をなすと等其理智之と異なるよし讀者先づ以上の理を知らされり後條の諸説を解するに或は惑ふ事あらん夫れ心せよ

幻術といふ術者の心力に由て他人の心身を制して自由に之を行動左右せまめ或は又種々の幻影を視覺せしむる所の方術を云ふ是れ亦魔術等と同じく心力平均の妙機に由て起る所の一種の現象に外ならざるあり故に一たひ之に感すれば術者の思爲する所に従て或は右ま或は左し或は笑ひ或は泣き席上山を現し目前海を生し百花の爛熳たる處鶯語滑に囀する春園の曙色月下に笛聲を送る荒涼たる秋風の夕一々術者の思爲する所に従て之を現す何を夫れ事の奇にして且つ怪ある又若し被術者の目前に一箇の杯子を置き之に牛乳を盛れりと思爲せしめんと欲すれば被術者之を傾けて頻りに其の味ひの甘きを賞し之を葡萄酒なりと思せしめんと欲すれば被術者の直ちに其の意思を感じて嗚呼香ひしき葡萄酒あるかあとして之を傾け其の芳烈を賞すへま

まかも滿面微紅を潮して時に醉語喃々することあり

凡て斯の如き奇異ある現象は殆んど彼の催眠術に感せしものゝ行爲に類して尙且つ之よりも奇怪なるものあり加ふるに催眠術に在てい

五官の媒介に由て始めて之を感ずるものありと雖も幻術に在てい全く五識以外に卓立して直に心力の作用のみを以て之を行ふことを得其の妙趣素より同日の論にあらざるあり

心力の甲乙彼我の間に感傳波及まて其の平均を求めんとするものにて其の活勢は克く對者を感格まて之を自由に制するものかれは術者の思爲固信する所の對者悉く之を感じて終に術者の意思と連合一致して全く同化するものなり對者といふ獨り人類のみならず他の有情物非情物をも總稱す

斯の如く心力の其の平均を求めんとする作用に由て克く他を制する

ものなりと雖も何人にてても隨時隨所に之を成し得へきと信するの大なる誤りなり是れ心力波動の平均を求むるの求め得らるへき時機に於てのみ作用を逞ふするものにして時機との對者の心力休止して全く無思放念せる場合を云ふ人若し放心無想ある時の其の精神作用休止して極めて安靜沈穩にしてまかも動かんとするの機を包藏するものおれり苟も他の心力の來て之を衝動刺戟するに逢へり其の休息せる心力の其の精神作用となりて現はるることなく單に其の活力のみを刺戟力に加へて活動を發作するものおれり術者の心力の益々其の勢を逞ふして能く其の目的を達するものあり休止せる心力の猶平穩なる水の如し故に若し微物ありて之に觸るれば忽ち波動を起して皺紋を傳ふるが如し其の相映し相激するもの變して聲をなし又色をおま花唇爲めに動き波情色を變す

夫れ然り心力の感傳の總て他の放念無想ある時機を撰むことを要するを以て若し對者にして此の時機の乘すへきものなきとき心力の感傳意思の移行の終に全く効を奏することなかむへし此の故に人若し他人をして自由に己の意思に従ひしめんとせり先づ機の乘すへきものを察すへし場所の靜肅あるも不熟者に在てり頗る必要なるか如しと雖も多少の習熟を経るに至れば場所の靜騷如何の終に施術の妨害とあることなかむへし只此の知機の妙趣にして了得したらんに幻術の施行感傳の誠に是れ易々たるへし

幻術の由來

幻術の由來頗る古し東西の各邦共に古來宗教家の手に弄せられて専ら之を鬼神靈物の威力に歸し盛んに奉拜敬畏したるものゝ如しカルデー、ペルシヤ、バビロン等の諸民族の既に遠く千二三百年の以前

に之を施行またり愛蘭のバレンタンクレートクハ有名なる幻術の
 の名手にして其應用の妙往々人をして驚嘆せしめし者あり愛蘭の民
 族の氏を指えて氏の鬼神より幻術の妙力を授與せられたりと云ひし
 か如き以て其の術の如何に巧なりしかを知るへし幻術の進歩の世を
 逐ふて巧を加へ千七百年代に於て瑞西のカスネル澳のメスメル等輩
 出して更に其の術の進歩を促したり然れども幻術ハメスメルに至て
 全く其の説を一變え幻術ハ學問上の問題となりて漸く宗教家の手を
 離れんとするの傾きありえメスメルハ獨り幻術の巧手たりしのみな
 らず彼の催眠術の妙手にして殆んど此の術の蘊奥を究め種々に之を
 應用することを勉めたるか如し殊に之を治病上に應用えてまゝ良好
 の結果を得今日の學者をえて催眠術治病説を唱ふるの端を開かまめ
 たるものハ實に其の効をメスメルに歸せざるを得ず

メスメルハ其の學ひ得たる醫學及び理學の力に由りて之を學問上の
 道理に合せしむるを勉めたりと雖ども世人ハ尙昏々として迷想恐
 怖に附翹せられて一向に之を鬼神の靈能に歸せたり從て幻術を行ふ
 者ハ幻術師又ハ魔法師雨師等種々の名稱を附して之を尊敬畏怖え特
 殊なる種々の優遇を與へたり

古代の人民ハ如何に幻術を畏敬し又之を行ふ者に對えて如何なる感
 念を抱きしやハ古代のバタコニヤ人の妖術師ハ己れの惡む所の敵人
 に害を加へんとする時ハ其の肖像に向て術を施し以て其人を殺すと
 云へるか如き又ヒブリエ人及ヒエチヲト人ハ魔法師ハ鬼神の幫助
 を得て遠隔せる土地の風景を眼前に出現せしむる者なりと云ひし傳
 説の如き又ハバルワートと云へる印度の或土人ハ幻術師に向ひ汝ハ如
 何なる神と通談し得るか又其神ハ如何に靈力を現し得べきや等の

事を尋ねしと云ふか如き其他リシイと稱する詩人か雨師に向て願く
 の汝の信する所の神の力に由て乳汁を出す所の牝牛を此所に作り出
 せと云ひしか如き幻術師を以て全く人類と鬼神の媒介者と信し従て
 幻術師の所爲の之を鬼神の靈能と思爲せしか如し

我國に在ても幻術の流行の佛教の渡來と共に其端を開き又屢々其の
 妙手を出せり弘法、日蓮、晴明、役の行者等の實に其の先達にして自由に
 幽顯に出入し鬼神を使役し妙趣神に通し其術の高妙深遠なること之
 を彼の幻術師、魔法師、雨師等の爲す所に比するに殆んど霄壤の差あり
 然れは邦人の之を見る者亦之を人類以上の行爲となすの勢の免れさ
 る所にまて往々彼の人々を目して鬼神とあし佛陀とあして奉敬畏怖
 することの今日も尙人の目撃する所あり彼等の學識德行非凡にして
 遠く俗流を踏破えたる達人たりしにの相違なきも其の奇行か亦俗人

の眼を眩惑して之に恐敬の念を抱かしめしに決して疑ふへからざる
 の事實なり現に近人か彼等の肖像廟宇に向て崇拜する所の者を見よ
 其の死後の人たることを忘れ猶曾て生前彼等か現はせし如き奇瑞を
 あし得へしと信して種々の事を願望祈念するにあらずや

古代幻術の方法

古代の人種の種々のことをあして幻術を行ひたり或は死人の身体の
 一局部を取りて焼焙し之を散布して幻術を行ひ或は水獺の舌野獸の
 牙等を以て幻術を行ひ得へまとい信し幻術者の斯の如き者を勉めて秘
 藏せり即ちパタゴニヤ人の妖術師か人の毛若くは爪甲を以て種々の
 幻術を行ふ者なりと信して之を他人に得らるゝことを大に恐れ印土
 の某部落人種の魔法師は人の血液を得之に由て其人に種々の幻術を
 施す者なりと信しチツペウハ人の幻術師に托えて木製又は土製の人

形を作り其の腹部を突き通して木屑土粉等を其穴に填め以て疾病を他人に移したりと云しメキシコ人中にハ水蟲の一種を取り之を焼焙して其の粉末を自己の目的物に散布し之れを自由に支配して妖術を云し得へしと信せるか如き或ハ又魔法師ハ死人の骨を以て製したる粉末を散布して能く人を恍惚たらしめしと云ふか如き或ハ蜥蜴の眼と墓の足の指とを煮て之を以て妖術を行ひ得ると信したる等其の方法ハ頗る多種なりと雖も要するに此幻術の施行ハ方法の如何に由るにあらずして信力の強弱と否とに由るに外あらず
 前述せる方法の如き獨り他人か之を信するのみあらず幻術師妖術者自らも之に由て幻術の行ひ得へきことを固信せざることをなし我國に行われし幻術の方法中或ハ指を握り或ハ之を屈する等彼の印を結ぶと云へる者ハ幻術の一法たるに相違なきと雖も是れ亦其方法の如何に

由るにあらずして只其の信力に由りしこと疑ふへからず

幻術の實驗

一種の幻術あり鎮魂術と云ふ西歐傳來の法にあらず又我上代の遺法にもあらずるへと思ふに近世宗教家の發明試行せし一種の方術に云て恐くハ或る場合に偶然發見したる者あらんかその兎も角も余ハ此話を瀬川氏に聞き又之を瀬川氏の家に見せり是れ實に心力の他を感格する妙用の好喩例に云て一種の幻術に外ならされハ記して之を同感の士に紹介すべし

此の實驗ハ昨年十一月三日即ち天長節の夜上野山下ある瀬川氏の家に於てなせし所なり午後七時より實驗は着手すへき旨瀬川氏より通知ありたれば余ハ一人の友人即ちこの友人ハ「キリスト」教の信者にして心理上の學問もある人故此人を立合人兼參加人の心得

にて時刻少し前に實驗の場所に至れり此術の術者の佐曾利氏と呼へる一紳士にきて年齢四十前後あるべく体格の中等なれども充分に肥滿せる方にて一見中々に莊重なる容貌あり余の始め瀬川氏に約きて故らに匿名にて參加する筈なりしに(こは心性上の意見に付佐曾利氏と少ましく見る處を異にせる由傳聞せるに由り若し各自の所見に由り議論などの面倒を避んか爲めなり)件の肥滿紳士先づ言葉を掛け貴下の今夕匿名にて來らるる由傳承せり然れども斯くての面白からず充分に意見を戦ひし幽玄を談する方興味深かるへしとて夫れより二三の談話をなま先づ兎も角も實驗に取りかゝらんとて實驗の場所に入れり當夜の參觀人は余等兩人の外に一二名の紳士と主人瀬川氏あり實驗の場所にい已み六七名の病者(健康体の人も見受たり)一齊に列坐して余等の入るを俟てり場内あり二基の

燭光微に光を放ち滿座靜寂として光景先づ自ら神々し各一齊に敬禮またる後術者の別に少しく離れたる所に着坐し病者に向て暫く閉目して心中に自己の疾病の平癒せんことを默禱すへま而して笛聲の發るを合圖に祈念を止め何事も思爲することなく放念無想とあるへし若ま身体動搖するか如き感あるも動搖するお任せて強て之を止めんとするか如きおとを避くへし且つ最後に拍手の音を聞かへ目を開くへましと施術中の心得を説き聞かせたるのち心中に默禱はへきを命したり病者の一齊に默禱祈念を始め術者自らも亦頻りに何事か祈念し始め其の熱心ある時々座間を感動せしむるか如きを感じり斯の如きこと三四分時にして術者の目を開き病者の光景舉動に注意し熱心に其機の全く熟し居るや否を探る者の如し暫くして術者へ其の懷中より拳大の石笛を取り出し之を吹き始

めたり忽ち急にして又忽ち緩あり殆んど心力をして甲乙を接着せしめんとを勉むる者の如し席上更に清肅を加へて却て荒涼の思ひあり余の病者の舉動如何と見回せしに只見る一箇の小女其頭の頻りに微動するか如きを此の微動の次第に勢を増して漸く其の運動を加へ頭首を前後に廻轉すること恰も機械にて作りし者の如く運動次第に加はりて頭首の全く後ろに仰折し殆んど其の後頭部が脊骨に密着したるかど疑はれ其の次に坐せる一老婦人の此時又両手の上下運動を始めて頻りに左右手を揺かせり不思議實に不思議あり此の運動の次第に傳はりて今の列坐せる病者一齊に運動を始めたり指を屈伸する者足を上下する者膝を打つ者其の奇怪なること一の電力に種々の機械を仕掛たるか如し是に於て術者の吹笛を中止せ如何に實驗せられまやと云ひつゝ閉目して拍手一番せまに

不思議や種々に行動せし病者の一齊に之を止め敬拜えて施術の難有かりしこと病苦の輕快せまことを謝せり茲に本術の實驗の全く了りを告げたるを以て予の病者お向ひて施術中の模様を問ひ試みしに或の恍惚として之を記し或の又全く之を知らざる者あり其狀恰も催眠術醒覺後の人の如し

此の現象の如何なる理由に依りて起り又如何にして病者が輕快を感せしかの本編各章を熟讀せし之を解することを得へけん現に瀬川氏の如き之を實地に施行し今の大に其の妙に達したり又此の實驗の終りたる後佐曾利氏の傍の紳士に語りて予の空中に種々の神体を現るることをも成し得へし熱心に望む人あらは何人にも神体を拜せまひへしと云へり此の實驗の予未だ之を見すと雖ども亦恐くは充分なる結果を以て心力感傳の妙用を證することを疑はざるあり

紀州高野の僧某深く顯密の法を修して法徳殊に高かりし或時某藩の士田邊某尋ね來り種々の立談に夜を深しゆる寺の弟子便所に行かんとして戶外に出でしに彼方の樹のかけに何やらん白き衣きたる者の佇み居るに驚き歸りて和尚あかくと告ぐれり和尚の打笑ひつゝさるへき道理なし佛道修業せん者さる小膽ある様にての叶はずと叱りこらせしに傍らに聞き居たる田邊某のこの面白き怪物の正体見顯さんとして立出てけるに和尚も共々打連れ庭に出で見るに不思議や小僧の云ひし如く白衣をきたる者樹下に佇み居て此方に向ひ動き來る様なりまかは田邊某の帶刀に手をかけ一刀に斫捨れど身搦へけるを和尚の之を止めて貴殿を煩ひすまでもあしとて例の顯密の法を以て何事か口の中にとなへつゝ彼白衣の怪物の方に向ひ指にて十字を二三度かゝと見しか怪物のばたりと音して仆れ

ける和尚小僧を顧みて今の恐るゝに及はず怪物の屍見てこよと云ひしかの田邊某も小僧と共に走り寄りて見るに怪物と見しの大なる誤り新しき白衣の棹共に眞二つに切れて落ち居たりし田邊某の一向に和尚が法力の程を感じそれより弟子の約をひすひて顯密の法を學ひしと云ふこの談話ハ予が高野の僧某に聞きし所あるか只野綾女の著らせま奥州波奈志と云へる書にも之に似寄りたる談話を載せたりこの法ハめいしんと稱して出家か災厄に逢ひしとき身をのかるゝ爲めの秘法ありと

明和安永の頃某藩に上遠野伊豆と呼へる士あり祿八百石を領して武藝に熟達し殊に手裏劍の妙手なりま此人又奇術に巧にして種々の行爲を以て人を驚かせしと少からず或時知己の人々伊豆の家に會飲せしとありし時伊豆人々に向ひ今日の慰みに芝居し見せん

とてつと立ちま間に座敷一面舞臺の体とあり高名の役者出て來りてたちはたらく体夢ともうつともつかす人々あきれ見てありしか鼓三絃の音面白く一幕終りまとき伊豆手をうち今日の芝居面白くいなかりしやと打ちえみて語りけるにそ人々氣を吞れて言葉さへ出てざりまとき當時伊豆の狐を怪ふならんあやしき事多しなど噂高かりしよし

狐狸の妖術

獨り小説講談に之を傳へらるゝのみならず自ら狐狸の幻術に陥りたりと語る人少まとせす然れども多くの之を以て一種の精神病とあし或の一時の精神變象ありとて無稽の說話として抹殺せらるゝか如し蓋し亦妄排の徒たるを免れざるなり然れ共彼の小説に傳へ講談に演ずる所の全く虚構的の者の勿論自ら實踐目撃またりと語る所の話説中にも往々事實の真相を失えて殆ど虚實相半はするに至る者あり是れ故らに虚を構ふるに非ざるも彼の狐狸の妖術に罹る時など多くの精神の正確を欠き事實を轉倒する事を免れざるを以てなり故に眞實の談話も狐狸談と云へり聞く人も大概の之に信を措く事少き者あり故に狐狸の妖行に就て之を研究せんとするにの宜しく事實を詳密に調査し其話説を分拆して能く虚實

を取捨せざる可らす否されん賤婦痴漢にも愚弄せらるゝ事あり
世の狐狸談中に種々異分子を混合せる者にして全く狐狸の所業に
あらざる事も其現象の奇怪にして一見其道理の解し難き者の時に之
を狐狸談の一に加ふる事あり例之枯骨の燐光を放つを見て狐狸の所
業に歸し昏夜道に迷ふて狐狸の所業となすか如き今狐狸の所業なり
と世に遇せらるゝ者を取て類別すれん凡そ左の如く分拆せらるへし

原因外界にあるもの即ち理龍卷、燐火、蜃氣樓、地
化學を以て説明し得へき者鳴潮聲、怪鳥、怪獸等

原因内界にあるもの即ち心
理學及生理學に由て説明し得へきもの
思想の變象に由るもの

全く狐狸の所業に由るもの

狐狸の怪行を説明する者を見るに悉く之を外界の現象に歸し理學及
ひ化學を以て説明解釋せんとし或は又悉く之を内界即ち心理上の作
用のみに歸して説明せんとす然れども是れ實に彼の妖行を以て務め
て物と我との二つを局在せざめんとする者にして其の眼光の未だ狐
狸に及ばざる者と云ふへし斯の如き理論の他の妖怪の一種をして偶
々眞の狐狸談より分離せざむるの効力を有すへまと雖も之を以て
到底眞の狐狸の妖行を解釋するに覺束あかるべし狐狸の人類と
同じく其心力を注集し他の動物に感傳し得るものにして吾人の心力
が他体に感通すると同じく他の心神散漫せる際に克く之に乗じて
憑附することをなま得へし即ち之を由て以て人及び他動物を玩弄し
或は又食物を奪ふことをなすものあり狐狸の妖行の人を魅して之を
愚弄し或は人に附憑して己の嗜慾を逞ふし其他嘯詐貪行種々あれど

も要するに皆吾人の心力感通と同一の理にして心氣の感傳に外ならざるへし殊も其の猜性ある尤も能く他の心力の虚實を察するを以て其の妖行を逞ふすること實に意想の外に出るものあり故に一たび彼の妖術に罹るときは其人たると他動物たるとを問はず一に彼の心のまゝに行動せらるるものにして彼右せんと欲せしめ左せんと欲せしめ則ち左せまむ一舉手一投足悉く其の願使に任するものにして恰も人形師の人形を操縦するに異らず彼狐狸も亦其の妖行を屢すすれい愈々其の巧を加ふるものにして之を行はさる時の終に其の能力を消亡するお至るものゝ如し其の老練熟達せる者は妖狐老狸と稱して時々人類を苦ましむることあり世人往々狐の犬に向て一步を譲ることを信ずれども若し狐にして犬の形姿を先に認めたらんに犬の又人類の魅せらるるか如く玩弄せらるるものにして是れ亦其の放心

せる時に乗して心力を感傳せしむるものなることを知るへま狐の他動物特に家鶏等を奪ふを見るに彼の先づ家鶏の所在に向て其の尾を左右に掉揺えて一向に心思を之に注集するか如き其の状を成す斯の如きこと數分時なる時の家鶏の巢にあるものゝ忽然として地上に墜落するを以て彼の直ちに走せ寄り以て之を咬へ去ると云ふ是れ實に催眠術に行ふ法式并に狐か人を魅するときには於る行為に能く類似するものにして其心氣を凝結注集するの状を知るに足る茲に狐狸妖行談の一二を記して讀者の覽に供す其談固より傳説に係れい多少の誤謬の如きは請ふ之を咎むること勿れ

ニユーストンドグラスゴーとの間を駛れる夜瀛車の將にある一停車場お着せんとする少し手前にて軌道の中に十八九才の少女子が餘念なく遊び居るより技手い大に驚き直ちに其の進行を止めて彼

の女子を軌道の外に退け再び進行を始めしに暫くして又以前の少
 女子軌道の中にたゞすめるに由り技手の頻りに瀛笛を吹きあらし
 て之に注意せしむる彼の女子の亦少しも之に感せざる故に又瀛車の
 進行を止めて之を退かしめんとせし時今まで此所にありし女子の
 影たに見へされぬ頗る之を怪みて又瀛車の運轉を始めしに彼の女
 子何所よりか來りけん又軌道に出づ斯の如くする事再三あるか故
 に技手の心を決して其の進行を續けたりしに大なる狐其の軌道に
 轢死し居たりと我國に於ても頗る之れを似たる話しあり西京大津
 間の瀛車開通して未だ幾許あらずし頃技手例の如く機關を運轉
 して西京より大津に向ひ今や逢坂山の墜道に入らんとせし時忽ち
 其の車前に大なる山を現して軌道なきを以て急に進行を止めて之
 を檢せしに軌道の依然として前に通れるを以て技手の頗る不思議

の思ひをなまぬ再び瀛車を進行せよめんとすれぬ又前方の一面の山
 と成れるを以て又進行を止めて之を檢するに軌道の依然たること
 亦前の如くありし茲に於て技手の始めて其の狐狸の所業なること
 を知り且つ此の近傍に老狐の徘徊することの常に知る所あるに
 由り斷然として其の進行を始めしに軌道に當て一聲の叫びと共に
 山の全く消失せり之れを檢せしに老狐の壓死せられ居たりと又曾
 て余か知人新橋より乗車きて赤羽に至らんとせよて途中目黒の停車
 場に至りしとき軌道に數多の兵士が戦装せるまゝ或は腕き或は佇
 立し三々五々一團となりて休足せるを見しより何くの兵士なるか
 を同車の人に尋ねたるに是れ全くの兵士あらず狐の悪戯をなす
 なりこの停車場の近傍に往々斯の如き悪戯をなして人を驚かす
 ことありとて其の實況を語りしことありと

赤坂區某華族(氏名詳かなれども故ありて略す)の邸にて其の宴席に於て時々瓶子小皿等の如き食器の紛失することありし始めの何人かの戯ありとて更に注意せざりまも屢々斯の如きとあるより茲に始めて不審の感を起し之を某學者に尋ね又祈禱等をなせまも其の奇怪い少しも以前に變ることなく來客ある時に時々この奇怪い或時某々哲學者俱に招かれてこの邸に會せしことあり宴酣あるに及んで又彼の奇怪い始めり瓶子先控紛失して小皿鉢又其の形を失ふ某々等頗る之を探るも少しも其の端緒を得ず家扶之を狐狸の所爲と察し陷阱を設けて終に大なる狸二頭を獲たる後彼の奇怪い全く止みたりと云ふこの談話の該邸に出入する某氏の直話なり余か知人山田某谷中清水町に寓す曾て上野廣小路の酒樓に飲み残肴を携へて歸路に上る友人戯に残肴を狐狸の爲めお奪はる勿れと

注意す然るに如何にせしか途を誤て深更に其家お歸り彼の残肴を檢せしに僅に空箱を残して食物の皆何れへか消失せり之を人に語るに皆狐に奪はると云ふ果して然るや否を知らんと雖も記して參考の一に供す

木曾の人山村氏の旦那寺に靈巖寺と云ふあり寺中に久しく住める老狐ありて寺僧の使指に由り種々の用を便す其の熟練殆んど人の如き曾て之に書を帶せしめて例の如く近村の某所に使せまひ途荒茫の野を過ぐ偶々獵人あり銃を肩にして行くに逢ふ獵人之を見て其狀の稍々常人に異なるものあるを怪み其の離隔するに及んで銃を以て之に擬す何そ量らん純然たる一箇の老狐ならんとい銃を撤して之を見れり又是れ老僕の使するものゝ如し獵人心頗る之を異ひと雖も終に意を決して發砲せしに銃丸の誤たす彼の老僕を倒せ

り近て之を檢するに先に見し一箇の老狐首に書箱を帶して他に使
するものあり書ハ靈巖寺より他に宛たるの書狀をれハ獵人の驚き
直ちに彼の寺に到りて此の頗末を語りしに寺僧も大に驚き且つ哀
みて厚く之を葬りしと(磯野氏の談話)

曾て奥州伊達家の士に鯨江六太夫あるものあり頗る吹笛の巧手に
して當時并ふ者おし六太夫雨の夜月の夕之を弄えて密に樂みとな
す一小童あり其の何れのものたるを知らずと雖も常に來り六太夫
の邸外に佇みて熱心に其の曲を聞く六太夫其の熱心を愛して常に
之を席上に延て聞かえめしに一夕例の如く六太夫の笛を聽居まか
曲了り童子六太夫に向て曰く余ハ人間にあらず實ハ此地に住める
老狐なり今や將に命數尽きて獵人の爲めに生命をたぐるへし願く
ハ平素の高願に酬ん爲めに古昔源平戦争の狀を演して高覽に供せ

んと言未だ終らざるに座上ハ見るく變して一面の海となり大小
の軍船舳艫相并んて呐喊山を崩し劍鏗相映し飛箭面を掠む緋甲を
被ふるもの錦袍を着するもの相撃ち相殺す六太夫魂飛ひ神往き茫
然として爲す所を知らず暫くして戦ひ全く了り座上ハ再ハ己の家
となり童子ハ去て其の行く所を知らずと事稍々怪奇に失れるの嫌
ひあれども亦以て彼か其の妖術の巧みなるを知るへま

神即ち靈物拜崇の遺風ハ世界到處に之を存し從て其の思想の變遷發達の如きも東西の各邦共に甚しき差異なま是れ各地方に存する所の靈物を意味せる言詞に由て察知せらる靈物トハ即ち天神、惡魔、佛、鬼、幽靈等を總稱して云ふなり

最始人類の思想にハ天地間萬象の生滅起伏ハ一として不思議怪訝の種とならざるなく日月の運行四時の變化ハ勿論死生禍福等の如き人事に至る迄凡て其の心にハ解し得ざりし雷電の空に閃き烈風の樹を抜くに至てハ不思議怪疑ハ變えて畏怖恐懼とあり畏怖恐懼ハ又更に轉して靈物拜崇の習慣となりぬ謂らば是れ靈物の憤怒せるに由る者ならん

斯の如く宇宙間に生起せる現象を舉げて悉く之を靈物の作用に歸するに至りしより靈物の種類ハ從て其數を加へ種々の名稱を以て之を區別するに至れり且つ靈物ハ各其の分掌する所に由て之を操縱支配せる者なりとの妄信ハ又終に之に向て種々の欲望を祈願するに至れるなり是れ勢の免れざる所にして或ハ長壽を願ひ或ハ一家の幸福を祈り禍を除かんことを求め病の癒んことを求む其の願望多種雜駁にして一樣ならんと雖も時として其の目的を達するの奇觀あり稱して靈驗利益と云ふ

靈驗を求め利益を望む者ハ其の熱心を要すること勿論にしてこの熱心を欠くときハ決して靈驗利益を得ることなし故に之に祈願する者ハ或ハ水に浴し或ハ食を絶ち山林に籠り堂宇に夜を徹する等種々の行爲を以て其の熱心と赤誠を靈物に誓ふ
靈物ハ人の熱心に應じて克く其の願望を満足成就せまひる者ありと

の感念より到處に款待優遇せられ或は其の貌姿を想像えて肖像を畫き偶像を造りて之を堂宇に安置せ或は物を供して盛んに其歡心を買ふに至る

幸福を得て喜ぶと云ふよりも禍害に逢ふて疑懼恐怖するの人情の常にして假令學識ありと云ふ人も困厄に逢ふて密に畏怖を抱き痴心兒女に類するの行爲あるの世間往々見る所にて亦是れ人情の弱點なるか如し然れは靈物拜崇の風は獨り兒女愚人の間に止らすして時に社會の上層に迄優遇を蒙りぬ

淫祠流行の風は大に民俗の純朴を破るの傾きあるを以て古來屢々之を禁止したるにも拘らず益々勢を逞ふして其の堂宇殿舎の壯麗結構遙かに國家祖廟の上に出るものあり我國に在て靈物拜崇の風は殆ど端を佛教の渡來に起し其の沿革中多少盛衰ありまに相違あさも漸

次勢を逞ふし應仁元龜天正の頃打續く戦乱の餘響に由て少々其の勢力を挫折せたりしと雖も徳川の盛時に至ては又大に其盛を極めたりし近世に至りて理化學の輸入この習俗に大頓挫を與へたるか如きと雖も是れ又其の一部分に止り社會の大部は依然としてこの靈物拜崇の空氣を以て滿されたり是れ彼の神道と稱する一派の教會及び其他之に類する奇怪なる教法が到處に流行するに由て之を徵すへ也此の俗は獨り我國及び他の東洋諸國にのみ行はるゝあらずして歐洲人中にも亦頗る之に類する者ありスグーラフト氏の説に由ればマゴタ民族は田獵に行んとするに當りて先づ靈体よ願くは吾を愛せよ願くは何所に鹿のあるかを我に示せよと云ふて靈物を祈ると又彼の古説に傳ふるアポルローと稱する神の守僧クルシースの嗚呼我が神よ吾へ會て汝の壯麗ある屋根を修葺し又常に牡牛若くは山羊の

肥たる股肉を焼きて汝に供せり故に其の報として吾の祈願する所を
賜許し汝の矢を以て希臘人を射殺し我をして仇讐を復さしめよとて
祈願したるか如き又彼のラミシースか多くの牡牛を供えたるを以て
其の報酬として戦争に勝利を得せしめんことをアンモンに向て祈願
したるか如き悉く是れ靈物に由て幫助を得んことを祈りし者あり其
他アマズル民族か信する人類を始めとして天体野獸に至るまでを創
製せしハアンクランクルありとの傳説の如き又同民族か嗚呼アトラ
ミニーよ吾々をして吾々の得んと欲する者を得せしめよ嗚呼神よ吾
々を死せしむる勿れ長壽を保たしめよ吾々をして死せしむる勿れと
云ひて祈願せしか如き其他印度人の願くハ鎧ふたる雷をして吾々を
救ひしめよと云ひてイन्द्रに祈り或る詩人の一人か朋友よ頌歌を
奏して乳汁を出す所の牝牛を此の所に追へよと言ふて祈禱せしか如

き實に是れ邦人か今日も尙或る宗教上の主旨に従ひ行ふ所のものと
更に異なることあし斯の如き妄信に由れるの行爲か單に宗教上の儀式
に止らすして往々其結果たる靈驗利益を得ることあるものハ必竟心
力平均の作用に由て信心の感通傳播するに由るからん
世の一種の宗教家か金城湯池と頼んて物理論者に抗する靈物の作用
あるものを分拆吟味し來れハ多くは此の心力感通の機能の誤信に過
きさるへし金箔を装ふたる靈体と鱗の頭と其の靈力に於て何の撰お
所あらん鱗の頭も信心よりどの金言ハ曾て既に哲人の口より漏らさ
れたり滔々たる迷信の徒ハ問ハす苟も世の上流に立ち宗長を以て仰
かるよもの焉くんを省慮する所なくして可からんや

日本上代の神は靈物よあらす

我上代の神ハ決して今日の人カ想像する如き靈物にハあらさりしあ

らん今人の神と云へる靈妙不可思議ある能力を有するものありと思
爲するより神と云へる言葉を聞くとき既に心中に畏怖の念を起す
と雖も是れ實に神の性質を誤り神と云へる言葉と靈物とを混同せる
に由る

我國の「カミ」の漢字の神歐洲の「ゴット」等といふ大に其の意義を異にし決
して靈妙ある能力を意味するおとあし英人サンハレーンが古事記を
英譯するに當て「カミ」と云へる言葉に適當ある文字おきに苦みたるの
實に我上代の神の性質を能く解したるに由るあり
上代に於て神と云ひし言葉の極めて輕く之を用ひられたるか如し即
ち人と云へる義又ハ公と云へる位の義を以て通常各人間の稱呼にも
用ひ又時として自らも之を稱したることあり例之ハ八千矛神の高志
の國沼河北賣を婚ひに幸行し時沼河北賣の家にとりて歌へれし歌に

自ら稱してやちほこのかみのみこと云々云ひしか如き又沼河日
賣か之に答へし歌にやちほこかみのみこと云々と云ひしか如き又阿
遲志貴高日子根神か天若日子か喪を弔ひ給ひし時其の妻其の父等か
天若日子と誤りしに由り阿遲志貴高日子根か怒て十搦劔を拔て其の
喪屋を切伏せ飛去り給ひし時に高比賣命か其の御名を顯はさんと思
ひて歌ひし歌に

あめあるや おとたかはたの
うかかせる たまのみすまる
みすまるに わあだまはや
みたに ふたわたらそ
あぢしき たかひこねの
かみとや

と云へるか如き又大國主の神か須佐之男命の御所に到り給しとき須佐之男命か大國主の神を見て此者葦原色許男といふ神ろやと謂給ひしか如き皆きみと云へる意に用ひられしを知るへし然れども其の稱呼の最も重く貴く用ふる場合に「かみ」と云ふよりも「みこと」と云ふことを云ひしもの伊邪那美命か伊邪那岐命に向ひての答へに

悔しきかも疾く來まますて吾者黃泉戸喫しつ然共愛しき我那勢命入來ませる云々

の如き又天照大神か天の石屋戸にさしこもり坐せしときの際に天の宇受賣か汝命に増りて云々せしか如き尊と云へる言葉の尊稱の中にも大に重くかみと云ふる言葉の輕く用られしを知るへし至貴曰尊自餘曰命並訓美舉登と書記の註にも見へたり然れども「みこと」と「かみ」の單に尊稱の輕重のみに由らすして多少時代に由ても之を異にす即ち

尊と云へるは古くかみと云へる稍々後代に多く用ひられたるか如く思ひる

上代に於けるかみと云へる言葉の單に人又の公位ある極めて輕き義に用ひられしことの前にに云へるに由りて之を知るへし尙神議神夜良神夜良比神集皆神と云へるか人と云ふ意に通して行はれしを知るに足る加之らす大國主神か其の兄弟に惡まれ玉ひ種々の危難に逢ひ玉ひし時其御祖か汝此の間にあらは遂に八十神に滅されおむと詔給ひし等か

と云へる言葉か如何に用ひられしかを知るへし
上代の「かみ」の實に靈妙不可思議の意にあらざるあり然れども其義の漸次に重を加へて佛教渡來以後に終に其の影響に由て全く靈物の義に變し從て支那の神字と同じく靈妙不思議の意に解せらるゝに至れりされは安曆か古事記を録するの當時の既に全く之を一種の靈物

と認め終に上代の人の一般に靈物と思爲せらるゝに至れり故に其名を録するにも配するに神字を以てし勉て古人をして尊嚴神聖のものとさせり獨り人類を以て靈物とさせしものとあらず中に鳥獸蟲魚にまで神字を冠して之を畏怖するに至る本居翁か「神と云へばと云ひとしくやおもふらん鳥あるもわり蟲あるもわり」と云ひしか如き以て其狀を察するに足る此を以て古傳を讀むもの充分に注意するにあらされぬ大に我古代の真相を誤り却てその神聖を汚すか如きことあるに至るへし殊に歴史編纂あるもの主觀的にあらずして客觀的に之を記すを以て史家か後代より附せし名稱と當時の人か口づから云ひしこととを克く區別せざるへからず古傳の「かみ」と云へる稱呼の如き史家か後代より敬意を以て之に配せしもの少からず是れ殊に注意を要すへきの件あり

上代に在て「かみ」と云へる言葉の如何に用ひられしか又之か靈物を意味するにあらざりしことの前述へたるか如し殊に上代に在て「かみ」をまつる即ちかみに奉仕することの之ありしと雖も所謂靈物を拜崇して吉凶禍福を一向に祈りしと云ふこと少しあさか如し是れ又靈物と云へる思想か上代の日本人に無かりし明證にして天照大神か忌服屋に坐して神御衣を織らしめ玉ひしの大賞の御式に用ひ給ふ御服を織らしめ給ひしものにして決して靈物祈禱の祭場に用ふるにあらざりしあるへし又神武天皇か鳥見の岡に皇祖天神を祭り玉ひしことあるも是れ又皇祖奉敬の天意にして決して靈物拜崇の陋習にあらざるかり崇神天皇の御時伊迦加色許男命に仰せて天之八十羅訶わかを作りて天神地祇の社を定め奉り給ひ其他種々敬神の事ありしも是れ亦皇祖皇宗を始めて代々の皇靈に奉へ給ひしに由る然れども

この御代にハ恰も疫病多く流行せしを以て時に靈物拜崇にあらざるかを疑ふものあれども是れ大なる誤りあり其の奉する所實に皇祖皇宗に外ならず故に此時代にも未だ靈物思想ハ起らざりしあり

靈物思想の起りしハ實に佛教の渡來に基く加ふるに神と云へる漢字の「かみ」ある言葉に誤當されたと相合して靈物の感念ハ漸く邦人の心裡ハ發芽し其の心に解せざるもの又ハ不可思議あることハ擧て之を靈物の力に歸し靈物ハ絶對無比の大能力者として宇宙の大主宰者と仰かれ人類ハ此の靈物に由て創造せられたりとの誤解より我遠祖伊邪那岐命伊邪那美命を以て先づ靈物の一に加へ從て上代の人の悉く之を靈物と誤認せらるゝに至れり茲に於て祖宗敬崇奉仕ハ變して靈物拜崇の祈とある既に日本後紀弘仁四年の條にハ奉幣於名神報豊稔也と見ゆ弘仁ハ如何ある時代そ空海新に歸朝して盛んに佛説を廣

め靈驗奇瑞頻りに行はれて社會ハ殆んど靈怪不思議の思想を以て滿されたるの時なり故に時に災害の起ることあれハ直ちに之を靈物の作用に歸し恐怖畏懼して一向に其怒りを解んことを勉めたり加之に佛家因果の説化身垂跡の議ハ陰陽道の鬼門金神の説と勢を合するに至りて奇怪ハ更に奇怪とあり不可思議ハ又不可思議を加ふ此の思想ハ後代中御門家吉田家の繁榮とあり引て今日に及ひ終に一種の類宗教的のものを現するに至れり

佛教の靈物思想と漢儒の所謂天ある感念及ハ神字の誤當ハ端無く我上代の有様をして誤解せしむるに至りし原因となれり恰も儒佛合成の色目鏡を以て上代を窺ひしか如し翠色掬すへきの老松も妖艶然んとする花も山も川も果てハ家までも彼の色目鏡の色に變したるに異ならず其影響ハ終に高天原をも天上の一界となすに至れり

斯の如く「かみ」其真相を誤られたると共に種々の名稱を以て之を區別せられし後村上天皇の朝に源順の著せる和名類聚鈔に「鬼神部を立て其内を神靈鬼魅の二類に分ち神靈部に「天神、地神、人神を収録し鬼魅の類に「鬼、邪鬼、虐鬼、窮鬼等の如き種々のものを集めたり今之を記すれり

神靈部

天神 地神 人神 心神 天一神 大白神 海神 河神 水神
山神 樹神 道神 岐神 道祖 産靈 保食神 稻魂 幸魂
靈 現人神 旱魃 土公 雷公 電光

鬼魅部

鬼 邪鬼 虐鬼 餓鬼 窮鬼 魍魎 魍魎 醜女 天探女

其の類別の奇異ある亦以て當時靈物思想の盛なりを察するに足る

轉して古來學者か神と云へることを如何に解せしやを見るに各々其の见解を異おえ或「かみ」上にまて頂上の意ありと云く「かみ」等皆其轉語ありと云ひ或「かみ」くしびの轉語なりと云ひ或「かみ」牙ありと云ひ其他日本上代に「實在の神と理想上の神と二種ありし」と云ふ等種々雜多にして未だ一定せる確論あることなし然れども「かみ」上ありと云ふか如き「四聲の變化に注意せざるものと云ひさるへからず殊に「かみ」の轉語ありといへども恐く「かみ」こそ却て「かみ」の轉聲に「あ」らざるか「かみ」と云へる言葉の神よりも遙かに古き言葉にして即ち伊邪那岐尊伊邪那美尊の誘君及ひ誘女君あるを以て「かみ」なる言葉の最も古きを知るその鬼も角も茲に「かみ」の意義に關する二三の解釋を掲げて讀者の參考に供す

本居翁の説に由れり神の數多の差別ありて貴きもあり賤しきもあり

り強きもあり弱きもあり善きもあり悪きもありて心も行ひもその様々に随ひてとりくにしむれぬ大かた一ひきに定めかたしと平田氏の曰く神と日本書紀の卷首に古天地未剖判陰陽不分渾沌如鷄子溟滓而含牙と云へる牙是れなりかびのかい彼の意にて物をそれと指して云ふことびの靈妙なる物を云ふ語ありかびのかびと同しくかぶと讀み又かむとも讀む頭大きく下細き形を云ふ頭槌かぶちの劍鏑矢などのかぶと同言あるか(中略)其のいと奇しく妙ある事を稱へしより及ひて造化の事にあつかり玉ふかみたちの中すも更なり凡て世に奇しく妙なる功德あるものをかみと云ふ云々かみと云へる言葉を誤りたるの靈物の思想に原因すれども高天原を天上の一界と思爲せるも亦一の原因たるをあらん左に余か高天原考の中一二節を抄出まて參考に供す

高天原を以て佛家の天堂と同じく天上の一世界と思爲するの輩の語るに足らずと雖も近世大に勢力あるの彼の高天原を以て一の邦國とあすの説あり其の何の地方なるやと云ふの暫く措きこの高天原國説こそ最も事實に近き説あらん(中略)然れどもこの説も亦史家か理想的を以て記せる彼の神傳と高天原時代とを混同せるの跡をまよと云ふへからず殊に其高天原を海外の一地方ならんと云ふに至りては頗る窮説たるの誹を免れざるへし

上代の歴史を説くもの古事記日本紀等の記事に餘りお信を置くこと深きに由りて却て其實を誤る者多し我古傳の固より其始め文字ありて之を記し置きたるにあらず僅に口碑に由りて之を語も傳へたるものおれり多少の誤傳あるは免れざる所あり加之其の必要の傳説にして忘却せるものもあるへく又傳説の順序の前後を或の

重複せるものもあるならん古事記の如き其編纂の當時既に傳説の漸く誤り多きを以て種々に注意えて事實を探明せられし事は天武天皇の詔に由て明かあり其詔に曰く

朕聞諸家之所貢

帝紀及本辭既違正實多加虛僞當今之時不改其失未經幾年其旨欲滅斯乃邦家之經緯王化之鴻基焉故惟撰錄帝紀討覈舊辭削僞定實欲流後葉云々

此詔に由ても當時己に古傳に誤りの多かりを知るに足る(中略)諸冊二尊以前ハ實に逸たり之を考ふるに由おし其の記する所亦甚た詳かならず古傳の記する所に由れハ國常立尊より諸冊二尊までを神代七世と稱すれども余ハ諸冊二尊以前を神代と云ふことの適當あるを信す二尊以前を神代即ち理想の時代と云ふ二尊を始めと云其

の以下を高天原時代とせば史を讀むに於て大に便なるを見る二尊ハ實に我國人類の始祖にして又邦土開闢の始祖なればあり高天原ハ何れの地方あるやハ頗る議論多きことおれども恐くハ四國又ハ四國沿岸の一區域なりしあるへしこハ二尊か先づ淤能許呂島に入尊殿を見立給ひしと云ハ淡道の穗之狹別を生給ひ次ハ伊豫の二名島を生給ひ順次に四國を開き給ひしか如き其他この神に關する舊跡の四國近傍に多きを以て之を徵すへし又冊尊崩御の時紀伊國熊野の有馬村に葬祭したりと云へる傳説に

有馬村有産田村即伊邪冊尊神退之地而其東有隱窟又曰花窟所葬伊弉諾岩窟也每歲暮春以繩作花及幡旗圍繞於窟歌舞祭之蓋往古之遺俗也云々

其他延喜式神明帳に載する所の淡路國津名郡淡路伊佐奈岐神社ハ

即ち二尊を祭りし者にして是れ隱居の地ありと云ふ其の傳ふる所
 多少の相違あるも二尊經營の跡を考ふれば高天原かこの四國近傍
 かりまことい蓋ま疑ひなきの事實あり殊に出雲其他附近の地方よ
 り高天原へ往來の頻繁ありまの一層之を確むるものあり(中略)高天
 原の天上の一界にあらざりしことい前に述べたる所に由て明かな
 るへまど雖も更に之を証せんと欲せば須佐之男命か高天原に上り
 來ませるとき天照太神か心善しき心ならし我國を奪はんと欲ふに
 ころと詔給ひしを以て明かなりこは實に高天原と他の國々と接續
 せる證據にしてくと云ふ言葉の境界と云ふ意あり縣居翁の説よ
 もくと云ふ名は限の意なり東國にて垣をくぬと云ふにて知るへ
 しかよれば地の天と等まなく廣く國の限りわれと狭きに似たり云々
 (中略)然り而して彼の下り又い上ると云ふことも必ずしも天上と地

下の意にあらすして現に今日にても帝都を中央と定めて之に遠か
 るを下りと云ひ之に向ふを上ると云ふにあらすや(中略)然り而して
 天孫降臨即ち日子番能遷々靈命の日向の國に移り坐すに及ひては
 日本の政廳ハ分れて二つとなり四國の高天原政府と九州の高千穂
 政府に分れたり是れ當時の政略上恐る己むを得ざるに出たるも
 のにして恰も高千穂政府は高天原政府の出張所の如き觀ありしを
 かん故に政事及ひ他の人事上の事にして高千穂政府の決し難きも
 のあるに及んてい必ず裁決を高天原政府に諮詢せるものゝ如し高
 千穂政府開設に就ても随分面倒ありま事の時々大國主尊と交渉あ
 りしに由ても知らる然り而して天孫か何故に日向の高千穂に御移
 轉ありしや其の理由い之を知ると能はずと雖も恐る此の日向地
 方い未だ定りし領主なきと人民の餘りに繁殖せざりしを以て恰も

今日の殖民地を開くか如き政略に由りしものからん該地方か無人
 荒漠の地たりと云ふことい古事記天孫降臨の段に於是脊肉韓國を笠沙
 之御前に眞來通て詔之此地の朝日之直刺國夕日之日照國なり故此
 地を甚吉地と詔給ひて云々韓國の借字にえて、から國即ち空虚國の
 義にして紀に云ふ所の空國おれの當時此の日向地方の無人荒漠の
 地たるを知るへきなり

天孫の高天原より船出まし、て四國の沿岸より大隅の外海を繞
 り日向に御安着御上陸ありて此の高千穂の地勢高燥にして皇基を
 固め玉ふへきの地たるを相してさては此地に宮城を見立給ひしも
 のならん古傳に御船出の有様を記して

故爾天津日子番能邇々藝命天之石位を離れ天之八重多那雲を押分
 て伊都能知和岐知和岐手天浮橋ふ宇岐士摩理蘇理多々斯天筑紫日

向之高千穂之久士布流多氣に天降坐しき實に御船出の有様の勇壯
 なりとを想ふへし(天浮橋は松なりとの古説あり大によし)されは我
 上代の歴史の所謂神代を別にして之を三期に分つことを得へし曰
 く高天原時代曰く高天原高千穂兩立時代曰く高千穂時代即ち是れ
 なり高天原時代の末の高天原高千穂兩立の時代にして皇化の東漸
 と共に高天原政府の終に神武の高千穂政府と再ひ合同歸一せり即
 ち我國の開化の一の已に高天原時代に於て四國を中心とえて中國
 南海に及び一は高千穂政府の開設と共に九州の東端に始り漸次東
 に及びたりと云ふへし(中略)高天原を以て天上の一界となすもの
 空想に馳せ又之を海外の一地方となすもの日本上代の形勢に疎
 きものなりと云ふさるへからず

即ちかまか支那の神又のゴットの如き靈物にあらざりしも種々の變

遷に由て終に一種の靈物の如く看做されまこと前に述べたるか如しこの變遷の移行の終に神道なる一種の宗教類似物を化成し來れり此の神道なるもの實に、かゝの誤解靈物の迷想を以て造られたるものにして其の説く所亦頗る奇怪なり神道の語に己に遠く藤原兼良公の日本紀纂疏の中に見ゆ後又種々の沿革を経て唯一神道とあり兩部習合神道となる唯一神道とい天道の即ち人道也人道の即ち是天道也天人唯一あるか故に唯一神道と云ふ天人唯一の理を窮めて立てたるに由り一に之を理學神道と云ふと且つ唯一神道にも新舊の二派あり舊派の唯一の表の佛道を現はさずして裏面に佛家の金剛界胎藏界顯密教など云ふ佛理を以て造ると雖も表面の唯一の神道なるを以て唯一神道と云ぬ又新派の云ふ所の全く佛法を除きて心學理學を以て造りたる天神唯一の道ありと兩部習合神道なるもの彼の本地垂

跡に由て成る其他尙神道の種々に分立し各其の見る所に由て異説を立つ然れども要するに佛説を加味したるものにあらずされ心學を取捨したるものに過ぎず近世に及んで神儒佛合同主義あるものを唱ふるものあり彼等の凡て我上代の歴史に諸種の理説を配劑したるものなるを以て其説く所頗る奇異あり神道の三部經と稱へしもの天元神變神妙經、地元神通神妙經、人元神力神妙經即ち是れあり之を以て佛家の三部經に擬せんと勉めたり且つ又千度の稜、萬度の稜等と稱して稜の詞を繰返し讀み穢れを穢ひ清むるとなると然れどもこの稜の詞は實に朝家二季の稜に用ふる所にまて之を通常人民が病難災厄を解除せん爲めに濫用するに大に不敬の所業たりしを免れず然れども當時更に之を怪むものあかりま其他六根清淨の稜無上靈寶神道加持の詞等種々あれども概ね牽強附會して佛家の經典を擬せしむ外あらず獨

り其説く所の奇怪なるのみならず其の行ふ所も亦頗る奇怪にして絶倒抱腹兒戯に類するものゝみなりし近世に及んで稍々此陋習を去りたるか如しと雖も尙其説く所の奇怪暗愚の陋見のみにして其行ふ所亦文化の進歩を妨ぐるものありとせず即ち或る一種の宗教の其の會堂の上に鉄製の棒を渡し是れ天の浮橋ありと云ひ信徒をして之を渡らしむ又心魂を授くると稱して紙上に天照太神と書したるものを取て之を把持し信徒をして之に觸れしめ暫時にして温氣を感じるに至れり即ち神魂の通したるありと云ふ其他神水と稱して水を病者に與へ或り吉凶禍福を下する等昔日の兩部神道よりも甚しきものあり是等海口を極めて基督教の妄を誹れども其の自ら説く所のものゝ更に此の基督の奇跡なるものより甚しきものありその偏見笑ふべきなり試に彼等か教會堂を見よ彼等か神聖なりとして拜崇する所の靈堂の

靈物非靈物の雜居地にしてその殿堂の和漢洋及び印度折衷の裝飾を以て裝嚴を裝ふの奇觀あるあり信教の自由の他の之に關涉する所にあらず加之熱心と心力の感通の時に一種の變象を呈するを以て假令彼等如何なる行爲をなすも差支へなしと雖も其の靈物に皇祖皇宗の御名を配え皇祖皇宗をして彼等の手に玩弄せまひるに至ては實に不敬の甚しきもの決して恕はへからざる所なり嗚呼之を信するものと愚に寧ろ憐むべきも之を説くものと心事の惡むべし以上掲けたる所の是れ昔日の所謂神道なるもの決まて今日の神道を云ふにあらざるあり今日の神道の宗規大に整ひ管長ありて各之を統轄し管長の悉く徳行高く學識博き人なり故に今日の神道の之を昔日のものに比するにその文野蓋し日を同ふして語るへからず

理化學の輸入の儘に幽靈の區域を狭めたり然れども其の有無虚實の論争の未だ全く其跡を絶ちたりとは云ふへからずこの獨り我國のみならず歐洲諸國に於ても然りとあす即ち幽靈鬼神に關する著書の詭多あるを以て之を證すべし

迷信に依れるの幽靈談の人の智の進歩に従ひ漸次其數を減すべしと雖も其の迷信によらざる者即ち眞の幽靈に至て人の智の開發に従て反て益々其光を放つに至る如何とあれは古代の幽靈の全く只迷信に由りて現はるゝ所の幻影即ち非幽靈も眞の幽靈も混同して單に幽靈と云ひ來りしものかれは學理に由て之を分拆類別すれは非幽靈の消滅を眞幽靈の残るへし例之鹽と砂とを一器に盛れは二つなから白くして光を放つこと頗る相類似せるを以て人之を砂と云へるも若之に

水を注加して振攪するときの鹽分の溶解し去りて砂のみ残留するか如し故に幽靈の學理の説明に由て其實存を確め非幽靈の學理の調査に逢て溶解融去すべし蓋し非幽靈といふ幽靈の如く見ゆるのみにして其實幽靈にあらずる者なり例之暗夜に白衣を認めて幽靈とあし燐火を認めて幽靈とあし其他蘆の枯穂荻の上風悉く時に幽靈と誤認せらるゝか如きを云ふ殊も多くの見る者の精神病者なるか又の想像の非常に旺盛なる時の如きこれなり古より幽靈の恐ろじきものゝ一に數へられたり幽靈の出る場所の寂寞たるも原因の一あるべく又幽靈の現出する時刻の半夜人定時なるも亦其の原因あるべし然れどもこの怪談的の幽靈又の彼の非幽靈出現の原因とあるべきも誠の幽靈に何の關係もあらずるなり幽靈の正体見たりかれ尾花と云へる古人の口吟の非幽靈か如何に外圍の狀況と場所に關係を有するかを穿

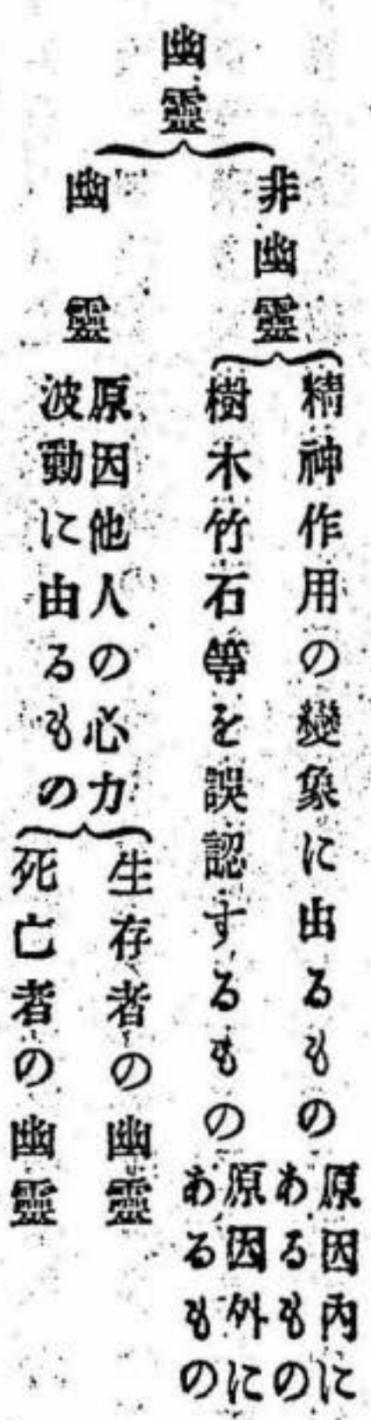
ち得て妙ありと云ふへま

斯の如く幽霊(誠の幽霊及び非幽霊)の出現か時と場所に関係して大に人心に畏懼の感念を起さしむるものありと雖も其の畏懼の重因の不思議と云へる思想が實に幽霊に畏懼の感念を伴はしむるものたらざるへからず實に不思議あり一たひ死せるものか又現はれて我目前に其の形を見せんといふ千思萬考するも其理を解し得ざるよりさてい不思議の轉して疑惑とあり疑惑の再轉法て恐怖の念とあるに外ならず如何に幽霊か人心に畏懼の感念を與へたるかは假令之を安排するの徒と雖も秋雨の蕭々として窓を打つ夜青燈に對して幽霊談をさせは多くは心中に恐怖の情を起すものあり然れども是れ古來の傳説を耳にするると久しきと所謂怪談的の幽霊を幽霊と混同するに由るものにして誠の幽霊の斯の如く奇怪あるものにあらず又恐ろしきもの

にもあらざるあり故に白晝にも出つへく半夜にも出つへく座間にも來るへく林園にも出つへく決して時と所とを撰ふことをあし即ち現るへきの道理ありて現れ來るへきの理ありて來ることを知れぬ幽霊の出る何の不思議なることかあらん又何の恐ろしきことかあらん其理を解せざるより不思議となり恐怖となるのみ
圓山應舉一たひ幽霊を畫きてより幽霊の凄愴の更に凄愴を加へたり頭髮長く垂れて顔貌凄衰し白衣腥氣を帯ひて冷酸骨に徹し見る者をして膚肌粟立するを覺えしむるものい畫工筆勢の妙を極むと雖も之に由て又大に幽霊の眞狀を誤られたるか如し我國に在ても中古以上の幽霊の形容の全く斯の如きものいあらずしかり
幽霊の實に心力の感傳に由て起る所の幻影なるか故に獨り死後に於てのみ現るものにあらずして生前にも亦現出するものなり否寧

ろ死後よりも生前殊に死に瀕するとき等に現はるるもの多きか如し
 斯の如く其の原因の心力の活動に由るものあるか故に幽霊の當時の
 感情如何によりて或は恐ろしき状貌を以て現はれ又悲哀ある顔貌を
 以て現はるるされは幽霊の世人の想像せる如く必しも悲愴凄酸あるも
 のとみにあらずして見て嬉しきものもあらん又慕はしき者もあらん
 幽霊の二種の區別あること既に之を云へり即ち幽霊及び非幽霊に
 して一は眞の幽霊にして一は類似の幽霊あり類似の幽霊の又之を二
 種に區別することを得るあり即ち一は精神作用の影響に由り諸種の
 感覺に異常を起す終に無實の感覺を惹起するに由るもの及び精神病
 に罹りたるもの一は外圍の状況に由て所在の木石器具等を誤て幽霊
 と認る者は是れあり共に是れ認識の錯誤に由て起るものにして類似の
 幽霊なり眞の幽霊の外來の心力波動の刺戟を感受し始めて起る所の

ものにして其の原因全く他に存するものあり故に類似の幽霊殊に其
 の精神の變象に由るもの其者一人のみ之を見ることを得へきも他
 人の之を見ることなく眞の幽霊の幽霊本体の心力如何に由て何人に
 も之を感ずるものなり



心靈の妙機の一種の活動を起して波動に由て轉傳感通し甲乙彼我の
 間を連貫一致するものありこの靈妙なる心靈の活動の最も思想の強
 鋭敏活なる際のみ發起するものにして心思の微弱沈衰せる時に
 決して此の妙機を見ることなし此を以て心力愈々強鋭なれり從て心

機を感傳すること愈々強く之に反するときは心機感傳の作用從て微弱となる精神一到何事のあらざらん心力一たび強銳に活動するときは何事か其の目的を達し得ざるべき從てこの機動の物に觸れて種々の現象を呈するものあり觸るる所に由て各其の現象を異にする草木に觸るれば草木之に感乏人に觸るれば人之に感す例之の同一の物を以て身体を刺戟するも其の觸るる局部に由て感覺を異にするか如し心機一たび動きて他の腦髓を刺戟衝動するや受感者の腦裏に一種の異常を起し全く施感者の心思と一致平均して受感者の腦髓の即ち施感者の腦髓の如き觀を呈し甲の思考すること乙も亦之を思考するか如く形影相伴ふに至る斯の如くさて受感者の心力の施感者の思考する悲哀憤怒愛戀等何に由らそ其の思想を感受充滿するを以て心の動く所終に五官機に變象を來し其の變象の動く所の思想に從て或の

恐ろしき影像を眼中に畫き或の悲しき相貌を目前に映そ怒れるもの恨むもの嬉しきもの愛らまきもの千態万様なりと雖も要するに施感者の心思如何に従ふものあり是れ實に幽靈の真相にして幽靈自らの思想に由て其の幻影の一樣ある能はざる所以あり幽靈を以て一概に凄愴なる狀貌ありと思爲するの大なる誤りなり幽靈の猶思想を複寫せる寫眞の如きものか

夫れ然り斯の如く幽靈の一種の感通作用にして心力平均に基くものあれば前にも云へる如く死後の人のみ幽靈の現はるるものにあらずまて生存せる人に在ても思想強銳にして心力の活動勃興するときのまゝ其の幻影を現はすものにして世俗に云ぬ一念凝りたるとき人の其の姿の見ゆることあり故に其の姿の如きも相貌こそ其の情感に由て種々移れ決して長髪白衣の怪狀に由て現はるるものにあらす

して多くの其人平時の容姿に由て現出するものなり
 人の心力の最も強銳にして固結するの嘻樂の感情よりも怨恨憤懣の
 感情あり殊に死●瀕して起る所のものの一層強烈にして且つ多くの
 悲憤怨恨等に關するものあるか故に其の思想の從て状態に恐ろしく
 又の恨めしく現はるものあらんこれ獨り幽靈に於てのみ然るにあ
 らずして平日は在ても憤怒の心内に動くとき自ら之を相貌に現は
 すの日常人の目撃せる所あり

以上述べたる所を再言すれは幽靈の甲の思想の動機を乙或は乙及び
 丙丁等に感受して腦髓に一種の變象を起し從て其の影響視覺に及ひ
 終に其の幻影を現出するものあり人或は云ん生前に在りては心力の
 波動を起すへは動機を有せざるも已に其人死して動機の根元たる精
 神全く枯死したる後に於て何そ心力の波動を起すことあらんは是れ

一應道理ある疑問なり然れども一たび起りたる波動のたとひ其の動
 元の既に滅するも其の餘響を他に傳へて之か平均を得るにあらざれ
 は已まざるあり例之の金線を緊張して其の一端を打つに其の打力の
 既に去るも猶其の波動を他端に傳達するか如し故に死後に至りて幽
 靈の出現するの游離の心力の平均を求むるに基因するものあり
 死後の幽靈の游離せる電氣の如し其の平均を得るに至るまでは何
 時までも其力を逞して他を刺戟し以て幻影を現はすものあり幽靈の
 其の死後に現はるものと生存中に現はるものとを問はず幻影當
 体の意思情感等の心性作用を有するものにあらざるあり是れ其の原
 因の心靈の活動に由て起るものありと雖も己に一變して心力なる一
 の物質的作用とあり再變して一の幻影とされるものされはあり
 生存中に現はる所の幽靈の其の原因たる或思想の休止すると共に

心力波動も亦其力を消滅し従て幽霊の又現出することおし即ち甲者か深く乙者を怨恨するか又の深く憤懣を抱く等の爲に現はれ去るものとすれば其の怨恨又の憤懣の解くると共に幽霊の其形を滅するものあり死者の幽霊に在ても亦其の生前の願望を満足するか或の怨恨の解くる方法即ち心力の平均を得せしむるに至れば終に其影を收む必竟死者の心力が遺留遊離せる所以のものに實に或希望又の目的を達せんとするにあるものなればこの遊離の心力を平均中和せしめ了れり其の心力不平均に由て現はるる現象に從て雲散霧消するに當然の事理にして彼の宗教家が行ふ所の祈禱又の施餓鬼と稱するもの實にこの心力の平均を謀るに外ならず

人の心中に常に種々の慾望感情の往來浮動するものにして其の心思の集凝固結する所滿身是れ其の慾望を以て作られたるかを疑ふも

のあり殊に憤怒怨恨羨望等の如き或感情は執念きはあし恨骨髄に徹すと云ふか如き又の悲憤腸を斷つと云ふか如き皆以て是等感情の強銳固結せるを思ふべきあり婦人か嫉妬に由れるの執念金錢上の慾望の又更に深し是等の一念殊に死に瀕しての一層強銳となるものあるか故に嫉妬深き婦人の死後強慾ある老婆の死後等に幽霊多きもの皆其の心力波動の遺留せるに由るものなるへし

凡そ幽霊にして其所謂非幽霊に属するもの多く一人にのみ見得るものありと雖も眞の幽霊に在てり其の死者の幽霊と生存者の幽霊とを問はず何人と雖も一たひ其の心力を感受したるもの皆之を見ることを得へし是れ實に其の原因の他に存在せる所以なり

以上凡そ幽霊の性質を述べ終れり然れども幽霊あるもの決して屢々現はるる者にあらずして稀に見る所の現象なるか故に世の幽霊を

して細かに之を調査分析したらんに十中の八九は無稽の談たるに過ぎざるべし然るに人の奇を好む奇上奇を加へ怪上怪を添へ以て此の説話を針小棒大にす苟も之か研究に従事せんとするもの先づ充分に談話の事實なるや否を調査せざるべからず否らされり大なる誤謬を來すことあり

左に記せるもの幽霊寫眞と云へる一話にして幽霊を寫眞せし試験の演説あり此の記事の二十六年六月八日及九日(六千四百八十七、八兩号)の日々新聞を讀みし人の其の紙上に幻夢庵と云へる人が評論の評論より譯出せしものを掲げたれば己に一讀せし人もあらん其の説く所頗る奇怪なるか如しと雖も記きて以て參考に供す而て此の演説者ハセー、トレール、テールと云へる人なりと云ふ

滿堂の貴女紳士私に數年來幽霊寫眞のことに付ての研究いたしましたか未だ實際に試験するの機會を得せんとせんてきた所がグラスゴロの名高い幽霊使ヒデー、チユギッド氏が偶々當倫敦に見えましたから私のおの機會に於て或友人に紹介せられて同氏に面會いたしました而して同氏に請ふて實驗の爲めに數日間逗留して貰ふことに取極めました扱愈々幽霊か寫るか否を實驗する前に互に約束しました第一の要件の道理上あり得べからざる事として充分懷疑心を以て吟味することでありましてチユギッド氏も私の欺術を行ふものと假定きて出来る丈嚴密に研究して下さいと彼自ら快く申しました

試験の場所のタルストンのある野菜料理店でありまして其の寫眞室の試験に申分のあき……即ち露程も欺術の疑ひを容れられぬ程満足なる部屋でありまして何一つ疑の種とあるものもありません

せんでした此の試験場に臨むたるもの幽霊使ひのチユギツド氏
 と私の外立會人とまて監督協會の會員學術院の卒業生各一人とド
 ヲトルケールグラスゴの商人二名并に此の料理屋の主人であり
 まして怪しきものゝ居させんてした

扱試験に用ひました寫眞版の勿論のこと其他此場所にて用ひます
 る道具の一切他人の手を借りませんで私か持運ひました室内の私
 か殊に注意して四方八面嚴重に吟味いたしましたか固より怪むへ
 きもの毛程もありませんから用意の道具を仕掛まして率と云ふ前
 に私の例の如く黒い覆を被りて試に向ふを覗いて見ますと何もの
 も目に遮るものもありませんから是ならぬよもやと心に思ひなか
 ら形の如く口をとりまして瞬間に塞いでしまいました夫から種板
 をぬき取りまして半信半疑で闇室に入りまして洗ひ始めました所

か不思議です實も不思議です幽霊のしめやかを委してありくと
 寫つて居りました而もこの幽霊の一箇の貴女てありました

其後度々の試験の同じ結果を得ましたか其幽霊の顔の私始め誰も
 何人であるか見覚えかありません多分我々の知らぬ人の幽霊に相
 違ふいと思ひます殊に其幽霊の顔と云ひ容と云ひ十人か十人皆違
 ふのみならず似寄たものもないもの不思議てありませんか但た
 其の時に寄りまきて鏡面の中心に現はれ又一寸隅に現はれ或は
 鮮明に或は朦朧と現はれた違ひかあるはかりてす

私の第一の試験の時即ち前に云ひました貴女の試験の時幽霊使ひ
 のチユギツド氏に向ひまして幽霊の寫る瞬間の如何な感覺得居る
 かと尋ねましたら同氏の只恍惚とまて夢路を辿るか如くニコリス
 ーとグラスゴの間を駛れる瀛車中に在て一隅の席を得たしと

思ひ居るのみと答へました

夫れより幾度の實驗を積ましまして幽霊の姿の色々様々に顯はれま
す所より段々穿鑿しませその畢竟カメラ！即ち寫眞鏡の幽霊を寫
すに必要でないことを發見しました今其の一つに就て云ひませ
れの通常の人間と幽霊を一所に寫しませた同し寫眞を幾枚も焼き
取りまするに人間の素より一定の位置に居りまするか幽霊の位置
か違ひます。仮令一枚の方の幽霊の姿の人間より高さ所に移れば外
の一枚の人間より低き所にありますこの事實より推考しますれば
幽霊の決まて先づ寫眞鏡に映寫するものてなきことか知れます而
してプレート即ち寫眞版に直ちに寫るものと信するの外は移りま
せん

幽霊か直ちに寫眞版に寫る道理の未だ全く知れません或の幽霊の
思想か凝結して……幽霊の思想と云ふての少しくを可笑様です
か何にせよ靈の固りか人の姿で顯れるのであるが又幽霊を寫す
にの寫眞鏡の必要でないと思ひますか尙日光其他の要用物の幽霊
寫眞に限り必要でないか否につきましては未だ克く分りません寫
眞鏡の必要でない事の前日も一言ままたか尙一つの實話があり
ますから序に申さしよう夫の幽霊使ひヂュギツド氏かタルストン
の野菜料理屋を出立する際に臨みまして家の主人……即ち私か
試験の立合人にたのんた一人てありますか……一の寫眞版を携
へましてヂュギツド氏に向ひ暫時之を以て闇室に入り吳よと述へ
ましてヂュギツド氏の快く承知して闇室に入りました凡そ三分時
を経まして家の主人の體で形の如く藥を注ぎ初めまると不思議
や一人の男幽霊が顯れました其の容貌如何と凝視すれば圖ら

さりき數日前私か試験しました時寫つた男幽霊と全く同一であり
 ままた尤も誰の顔とも更に見覚えのありませぬ此の實驗お就きま
 して此家の主人の受合て云ひました彼のチユギツド氏に一寸も
 たせたる迄にして寫眞版に指の頭たも觸れさせませんでしたと
 實際の試験の大概この通てありますか其の成績の如何と云ふに殘
 念ながら私の不可思議なる問題をまて益々不可思議おらしめたり
 と答ふるの外ありません併し私の實驗に於て多少此の問題を考
 究するの便宜かありますれば實に望外の幸てあります

此の實驗の頗る奇怪なるか如しと雖も心神の作用上亦決まておし難
 きにあらざるへし佐鳥某ある人頗る神理を解し能く心力を以て今を
 制す其妙殆と神に入る此人時に神体を拜せしむると稱して種々の神
 体を現することあり其法先づ信者を清寂なる一室に誘き入れ數人整

然祈禱せまめたる後其の鎮魂するを俟て默禱一番すれは種々の神体
 を空中に現す之を拜するもの感銘肝に徹すと云ふ而して信者をして
 一人つゝ順次別室に出して拜せし所の神体の模様狀貌を尋ぬるに各
 人悉く一樣あり是れ或の前記チユギツド氏の幽霊と恐くの同一の理
 因に由るにあらざるか

淺草七軒町に余か知人あり此人のものと美濃の人當時來て此所に住
 むものあるか曾て此人か郷里にありして後召遣ひし下僕忠助ある
 ものあり今の年老ひて六十五六才あるへし其の性質の忠實ありし
 より時々家内の人々も彼かことを語り出て其噂をなほことありし
 に一日突然彼の忠助七軒町の寓居に尋ね來りしに珍らまき人の
 尋ね來ぬるものないたく年老ひしなど種々談話おとし茶菓など
 持出でるもよく休息して府下の見物もすへしとて打語るあいた

彼の便所にや行きたりけんつと立ち出しまゝまでともく歸らざるよりそこよりたつね求むれども影たに見へず田舎人のことよて物珍らまきまゝ立出て途にや迷ひけんちと種々心をいためてまらしに終に其日の暮る頃までも歸らざりしに家内の人々如何おとからひてよかるへきなど云ひあへるをれより二日目の夕方に一通の郵便來りて忠助永々病氣の所此程死去したるよし申越せしかは人々大に驚き怪み先日忠助の必定彼か幽霊なるへまざるにても日中に幽霊の出るも奇怪ありとて此の由を書面もて彼の家に問合せしに更に出京したることおし併し忠助の娘あるもの當時いろはと名稱りて芳原の某樓にある由返事來りければ彼にも逢んとて彼の幽霊來りしならんかと彼女にもこの由かたりて厚く佛事を行ひ彼の幽魂を慰めたりと

同じ人の前に家永某と云ふ小學教員住みけりこの教師の妻なるもの病にかゝりて打伏しけるか常に極めて温和の人なるに病にかゝりてのちの稱う嫉妬の心出て若し妾ありし後の良人の好き妻迎へ玉はんあねたましなど云ひ出ることとも屢々なりまか愈々身まかる前あなりて突然床の上に起直り恐ろしき顔してあなうらめし妾死おは良人の必ず好き妻迎へたまはんと氣色をかへていひけるにそ教師心におそれを抱きゆめくさやうのこといすまま安心せよと慰めければ妻大に喜びて嬉まき笑みをもらせしかそのまゝみまかりける始の程の教師も獨身にて暮せしか日をふるまゝ人も妻を迎ふることを勧めければ千住某所に恰好の女子あるよしをきゝ媒人同道彼の家に至りて見合しけるに歸りより教師大に發熱して悶へ苦みしか二三日にて全快しければ程無く彼の女子を迎へ

て家の妻となしぬ然るにこの頃より家内に不思議起りて毎夜亡妻の姿現はれて夫婦の眼に見ゆるより教師のいたく驚き恐れこの家を立退きて他所へ引移りしかはこのことを知るもの更に無かりしか暫く去て彼の教師の住みし家へ引越し來れる人あり不思議にも毎夜怪しき婦人の來るに由り始めの狐狸の所業あらんと思ひ之を追拂ひしにこの姿の現はるゝこと少しも前にかはることおければ茲に始めて幽霊の噂たかく彼の教師の亡妻の幽霊ならんなど云ふより終に其人も此の家を立ち去りしか來る人なく皆この幽霊の姿を見たりと余か彼人を尋ね去時其家の明家となり住人もおかりし又之と殆んど同じ話あり其の談話の確實なるまじ茲に記す府下屈指の會社に永田某と云ふ取締役を勤むる人ありこの人性來花柳の遊を好みて常に其家にあることも希なりしか新橋某所の藝妓にて

小花と云へるの永田の二なき愛妾にて子はへ生みける永田の妻の之をさくく最とくやしきことに思ひ願ふ彼の小花を遠くすることを云ひけるかさすか夫の子おればにや彼の小兒の時々我家にも呼び入れわか子の如くに愛しける然るに妻は病氣となりて今のたのみ少くおかりけるをり枕邊にある夫に向ひ妾今は思ひ残すこと少しもおしされとも彼の小花の事のみ如何に思ひ反さんと思はるも叶はず願くは妾の死後に必ず彼を遠け玉へて死けるか永田の其後も前にかはることなく小花を愛せしに或日櫻屋と云へる待合にて小花に別れ歸らんとてつと立て境のふすまを開きたるに人の氣はひするより何人そと見るにこは如何お亡妻か悄然として坐り居しかは男も女も驚きて逃げ歸りしと其後の二人が會合するときは其の姿現はれ果てに常に此の待合に晝夜の別ち無く現はるゝよ

り何人の目にもふれ障も高くありけるにそ永田の小花と待合のあ
るしを打ちつれ妻の墓に参りて堅く後來を誓ひて歸りしかその後
の再ひ現はるゝこともなくなりしと現に余か知人石浦某も之を見
たりとて物語れり

幽霊談の獨り日本のとならず外國にも多しドクトルヒツパットの怪
物論を見し人の必す之を知るからん

英國の汽船某号にて水夫の死せしことありまか數日を経て航海中
彼の水夫現はれ甲板の上を徘徊するを見しか其後の時々現はれ出
てしに由り他の水夫等も終に之に慣れ亦パイロンの出まゝとて驚か
すかりしとパイロンの死せま水夫の名あり

非幽霊

世上に幽霊談として傳へらるゝ事柄にして之を仔細に吟味すれば全

く幽霊にあらざるものあり半假に名けて非幽霊又の類似の幽霊と云
ふ而してこの非幽霊の多く外國の狀況に由り又の幻想に由て起る世
の幽霊談の多くこの二つのものに由て構成せらるゝか如し外國狀
況どの半夜墓所を通行し又の夜雨蕭々たるときに古戰場を過る等身
邊を圍繞する景物の寂寞荒涼に属するを云ふ幻想の精神作用の異常
に由て起るものにまて之を生すへき形体的の刺戟をくまて物象を見
又音聲なきに其聲をさく等の如く諸種の精神作用特に外覺作用を起
すを云ふ五官器の異常に由て之を起すことあり又思想情緒の盛なる
とき其の影響に由て之を起すことあり時としてこの二つのもの相
合して幻想の原因とあることあるあり

五官器の變象の其の疾患に由て之を起すことありもとよりありと雖も
又其の媒介物即ち空氣等の狀態如何に由て之を起すことあるものあり

り例せし風の爲めに竹竿樹梢を掠むる聲をききて妖怪幽霊の來るか
 と怪み光線の屈折に由て物体の真相を誤り之を幽霊かと驚くか如き
 皆是れ媒介物の状態に由て起る所の幻想なり
 精神病者が視覺聽覺等の幻想の盛あることい入々の知悉する所なり
 と雖も假令精神病者にあつても往々幻想に由て幽霊を見ることあり
 り是れ心内に想像情緒の如き心性作用の浮動盛あるに起因するもの
 なり五官器の常に外來の刺戟に逢ふて始めて之を覺知するものありし
 て外物の刺戟なきときい決して五官器の何等の感覺を生ずること
 なし故に外來の刺戟先づ五官器を衝動刺戟して而して後ち之を思想
 の中樞に感ずるものとす五官器と思想の中樞との神經を以て連絡關
 通するものにまて外來の刺戟に由て知得せま所の景象にして五官器
 に映することい必ず其影を中樞に落すこと猶寫真鏡のレンズと壁硝

子の關係の如き
 斯の如く五官器と中樞との密接の關係を有するか故に若し或事情に
 由て中樞の興奮盛あるときい其興奮を五官器に反及し茲ふ一種の變
 象を起すものなり常にい外來の刺戟と五官器との關係強固あるか故
 に思想の爲めに五官器に影響を及ぼすか如きことなまとい雖も若し或
 る事情の爲めに想像情緒等の非常に作用を逞ふすることあるときい
 前述の如き一種の變象を來す故に心中に死せる友人の事などを深く
 思爲し或い其の幽魂の現はるゝことあるへしと思ひ或い又誰々を斬
 殺せるい誠に非道慘酷ありしを以て其幽魂の來りて我を襲ふあらん
 等の如き思想情緒心裏に往來すること頻りあるときい終に中樞の興
 奮を五官器に傳へて茲ふ一種の變象を起して幻影を見るに至る五官
 器中最も變象の多きい視覺聽覺にして殊に視覺の之を生起すること

多し故に或る心情の盛に浮動するに當てり往々幽霊を見ることあり之を説明すれば左の如し

甲 乙

外來の刺戟 幻影

五官 五官

中樞 中樞

甲は是れ平常に於ける物象と五官器と中樞の關係に於て乙の之に反して中樞の興奮盛にして五官器に影響を及ぼして幻影を現出する時の關係あり

是れ幽霊の精神作用に由て起る所のものにして非幽霊の原因なり大概の之を以て幽霊とあすもの多し

以上説述せる所を概括して云へば非幽霊の精神作用の變象に由て一

種の幻影を見るか或は又外圍の狀況と精神の變象と相合併して之を構成するものありと云ふへし

ドクトルルチエーグ氏一日寫眞帖を取出し繰返して友人親族等の肖像をかめ居たりしに内に數日前死去したる友人の寫眞ありければ思はず其言行を追想し愛慕の情を起せしか起て他室に入らんとするるとき氏の前面に彼の友人の佇立せるを見一時の大に驚きしも其の幻影あることを察し之を熟視するに幻影漸く消滅して終に窓掛のレースとなれり依て再ひ之を見んことを勉めたりしも能はざりしと云ふ

又

千八百六十七年の頃英國に於て火災の爲めに焚死せし一紳士の未亡人追吊の爲めに其墓地に至り心に怪むべし死せる夫の巖然とし

て墓地に佇立し居たるにそ婦人の愛慕の情に堪えず握手せんとし
て近寄りしに其夫と見へしに全く幻影にして墓上に建てありし標
木ありしと

水鳥の羽音を聞て敵軍の襲來かと驚き尾花の風に靡くを見て幽鬼の
我を招くかと怪むの類皆これなり

此の思想感傳に由る現象は自然に發するものなりと雖も人工を
加へて之を起すことあるものにして此の場合に於ては受感者の
心に何等の暗示もなしに其の靈魂が他人の思想を感ずるものなり

靈憑 生靈死靈

彼の靈なる心力の活動が他人に感傳波及するの結果に受感者の心身
に一種の變象を起すことあるものにして此の場合に於ては受感者の
全く自己の精神を亡失せしめ施感者の思想を其の儘に感受するものにし
て恰も甲の思想が乙に飛據せるか如き看を呈するに至る故に施感者
の思爲することの受感者も亦之を思爲せしめ施感者の言へんと欲する所
のことの則ち受感者の口に因て話説せらる施感者右せんと欲せし受
感者即ち右し施感者左せんと欲せし受感者即ち左す歌はんと欲し笑
めんと欲し往くと欲し止らんと欲して甲乙悉く相從ふ此の奇怪なる
現象之を稱して靈憑と云ふ施感者の靈魂が受感者に憑附するの謂ひ
なり

此の思想感傳に由る現象は自然に發するものなりと雖も人工を

以ても亦之を行ふことを得其の自然に發るものゝ世俗の所謂死靈及
ひ生靈と稱するものにして人工に之を試むるを靈翹術と云ふこの術
ハメスメルズム等と同じく古昔キリシヤ人及びローマ人等が往々施
行せし所にして特に僧侶が天神の功驗を説く爲めに専ら用ひられし
と云ふ野蠻人の思想にこの思想附翹即ち心力移行の現象を以て天
神靈物の作用お歸し頗る之を信仰恐懼えたるものゝ如し故に一舉物
を行はんとするときに其の判断の決し難き際にこの靈翹術を利用
し之に因て其の如何を決したるか如き又或は災害危難に逢遇したる
時の如き之を以て天神靈物の憤怒に歸し又靈翹術に由て天神靈物の
思慮を尋ぬることあり例せばニバルドルの魔法師がサミエルの幽靈
を呼ひ其の訓告を得んとせし如き又ヨラバ民族が雨師を以て靈物を
勧誘するの力を委せられたる媒介者ありと云ひしか如き其他我國に

在ても「いちこ神をろし」と稱するものゝ類皆思想の傳播に因て發起す
る現象を誤りたるものあり之を要するに野蠻人及び宗教上の妄信者
の他人に翹據する所の思想の傳播を以て一種の靈物又は天神ありと
誤信し其の天神及び靈物の普通人類の如く感覺知覺思考等の諸能力
を有するものありと誤信するに由る

死靈の憤怒怨恨等の如き思想の遺留せるもの即ち游離の心力が其の
目的の人に向て平均を求むる際に起る所の現象にして此の場合に於
てハ受感者の全く自己の神心を喪亡えてこの游離の心力即ち死者の
思想を以て腦中に満たさるゝあり其例古來少しとせず

靈翹術即ち特更に思想を受授感傳するの法の二種に區別せらるゝか
如き即ち受感者か特に己の精神作用の休止を謀る爲めに可成無爲無
我の方法を取て他の心力の感受附翹を容易ならしむるもの即ち「いち

この類と一は受感者をして其の思想を休止せしむるか爲めに諸種の方法を以て他物に心力を注集せしめ漸次其の無想の境に至りしを謀り施感者か其の機に乗して己れの思想を附翹せしむるもの是れなり即ち降神術の術者の如し故に甲の場合に在て受感者即ち「この何事に限らず其の依頼者の思爲する所を其儘に口に漏し乙の場合に在ての神住(即ち神の附翹せる人)の無心に術者の思想又他の詰問者の思想を感受して其の思爲する所の如く語る然れども二者主客差異あるのみ

この思想感傳の作用も亦心靈動機の轉化に起因するものおして即ち張力の變じて活力も亦あるに因て起ること前の各章に述べたる所に異ならず故に彼我甲乙の連貫一致を要すること勿論あり前にも云へる如く心力の感受の受感者の精神作用休止したる際にのみ其の作用を

現するものおれり假令睡眠時の如く永く其の作用の休止せざるも少時にても其の休止せる時にあらされり決してこの心靈附翹の現象を見ること克はず然れども其の一たび感受したる後の容易に又離去することおし特に受感者か之を屢々行ひて習熟せるに至ては其の附翹も實に容易にして其の現象の奇なる一見之を信する克いさるか如きものあり而して其の自然な發せる靈翹即ち死靈生靈たると又人爲に附翹せしむる所の彼の巫女、口寄、降神術等たるとを問はず心靈傳播の了りたる後には其の翹據中何等の事をさせしか又何等の事柄を話説せしかり更に之を記憶することなし特に其の離去の後暫時の間は恍惚として容易に心神整復せざるものあり

名古屋巾下町に桶屋某あるものあり家世々日蓮宗の信徒にして某も亦頗る熱心なる信者なりしか先年其妻か眼病を患ひたりしによ

り某の切りに信心をよめて其の平癒を祈禱せよか其の甲斐なく終に妻の失明せり某大に怒て余か家の代々本宗の信者あるも祖師大士の惠護なくして妻が失明するか如きは是れ祖師の佛力靈驗なきによれり今よりの断して本宗を脱すへしとて家に安置せる日蓮上人の畫像を破らんとせしに傍らにありし妻忽然として一種の異相を形成し奇異なる語調を以て余の祖師日蓮なりと絶叫し徐るに口を開きて曰ふ汝然か思ふの大なる誤りあり先づ心を静かにして余かかたる所をさげとて端坐して威儀を繕ひけれり某大に驚懼し敬恭の念忽ち舊に復ちて妻なる日蓮の前に平伏せしに妻の語を續けて曰く汝の妻の失明せるは汝か平素の信心によるあり夫れ女子の物に執着深く從て迷ひ易し執着多く迷ひ深き罪深き道理あるか故にこの罪を去らんか爲に失明せしめしかり夫れ執着の五識によ

るもの多く特に眼識に因て執着を起さしむるもの多し故に之を断てい迷を捨て執着を去り從て種々の慾念を除くを以て善根之より大なるはちし美麗なる衣服を見善き飾物を見て煩惱の念を起すは女子の常あるか今よりのちのこの事なかるへしゆめ疑ひを抱くこと勿れ故に何事も限らず汝心に不審あるか又の安心せざる事柄あるときの一々余に尋ねへし余の汝の妻に廻りて之を教示すへよと言ひ終りて妻の卒然前に倒れたり某信心膽に銘し之れより信力舊に倍し決せざることを又の不審ある毎に其妻をして端坐せしめて禮拜す然るとき己の思ふ所の神佛妻に廻りて之を教示せりと豈亦一の奇談あらすや

然れの近隣の人々之を聞き傳へて争て夫妻の教示を乞ふに一々己れの思ふ所の如く不審を判断すると實に不思議なれり人々の崇敬

大方おらさりしか桶屋夫婦の余が舊里へも來りて諸人の乞ひに應じて吉凶を斷し不審を判せしに其事を傳へし血氣の壯年數輩、文明の世にかゝる奇怪のあるへき道理なし往きて其の詐術を見顯さんとして其の旅宿に至りて桶屋夫妻に面會し頻りに之を論難せしかの夫婦のもの云ふ我等の極めて愚かにして到底議論等をあすこと叶はず只祖師上人の教示に従て諸人の吉凶を判するに過ぎされの論より證據あり妻に向て直接に教示を受けその不審を質せよと云ひしかは壯年等大に喜びていさ問答せんとのめ寄せければ某曰く祖師と問答せらるゝ最とやすき事おからたとへ足下等之をなすも祖師の音聲容貌を知らざるか故に恐くのつくり言なりとて信せざるへし寧ろ足下等の知人を呼び出して面會問答せらるゝころよければ是れ却て其の疑惑を解くに便ならん知人に物故せし者の無き

やと問ひければそは此方より望む所あり然らぬ余が兄先年死去せるものあり之に面會したしと求めけるに桶屋の更に其兄の名の何と云ひしやと問ふ壯年其の法名を以て答へたるに某云ふ様夫の僧侶が死後に命したる者おれぬ之を云ふも足下の兄の自分の名あるを知らざるへき俗名の何と云ひしやとの問ひに先づ其正理なるに稍く壯年の心を曳きたる者おらん是に於て答ふるに俗名を以てしけるに某の領して其妻に向ひ暫時祈念を凝したる後ち突然壯年の兄の俗名を高く呼ひしに不思議なる哉妻の面貌頓に異相を呈し眼を開きて壯年に向ひあを珍らしや弟よ汝に久しく面會せさりやか身体は健康なるや汝の幼年なりし故に記憶せざるへし余が先年井中は溺死せし際非常に苦痛を感じて終に幽界の人とあり後の種々の雜業苦痛を経て終に今日にこの幽界中にて稍も安樂なる身と

なれどと云ふ其の答辭頗る奇の則ち奇ありと雖も音聲語調實に阿兄の生前に異あらざるのみあらば精神上の作用もや其の容貌さへ幼な顔に見覺えある兄に似りしとあり且つ其の兄ある者の誠に桶屋の妻か云へる如く往年井中に溺れて死亡せしに相違なければ壯年等も餘りの不思議に恍惚として夢とし如く尙種々の事柄を尋ねるに一々心に覺ゆることのみありと而してその妻の答ふる所は壯年の心中に斯くあるへし又は斯る事柄あらんとの想像に一々符合せりと

地藏廻

磐城國白川附近の地方にて地藏付と稱すること行はるこの某所の地藏か何人かに附廻して種々の事を預言し又の信者(寧ろ遊戯者)の望みに應じて種々の舞踏をなし或の流行歌を謠ふものあり其事頗

る卑俗ありと雖も亦心力感通の作用に因て克く人を左右することを得るを證すへきを以て左に之を記す
 地藏付といふ農業の間に村内の人々打集まひて一團とあり先づ始めに一人の地藏の付廻すへき人を撰ひ之を中央に圍みて團坐し其の人の手巾を以て眼を閉ち斯て準備全く整ひたるとき其の周圍の人々一齊に床を打つて地藏地藏地藏取り付くと連叫するなり斯の如きこと暫時なるとき其の中央に目隠しせる一人の無我無心とあり謳歌につれて身体を運動し始むるに至るへし之れ地藏の付廻したる徴なるを以て一齊に叫呼することを休め周圍の人進みて何れの地藏來ませしと問ふへし然るとき其の彼人の我の某地の地藏ありと答ふるを以て人々の種々の疑問を發して地藏に教示を乞ふあり其他地藏尊の何を好むるかや大津繪節ありかつぼれあり御聞せあり

るへしと云へん地蔵の聲高らかに之を謳歌す又然らば何ありとも
 一曲御踊り下さるへしと云へん地蔵立て舞ふ周囲の人一整に謳歌
 して之れに和そ之を地蔵付と云ふ盛に行はるゝ習俗ありと而して
 全く種々の游戲終れば地蔵御歸りあるへしと云へん地蔵突然とし
 て前に倒る是れ即ち地蔵か歸り去りま徴あるにより彼の目隠せし
 人の顔に水を吹きかけ又其脊を打つ等をなせば暫時にまて精神
 整復せし然れども此の演したる種々の事柄の凡て之を記憶せざるに
 とおし又其の演することの曾て其の人知らざることをも之を行ふ
 と而して其の演出せること又の預言等の凡て尋問する人の思爲せ
 ることを語り思爲せるか如きを演ずると云ふ
 この事の各地方に行はるゝものにまて府下近傍の某村等にも之を行
 ふことありと聞く蓋し心力感傳に外ならざるあり

予か知人某氏の本術の研究に熱心にして種々の試験をも成して頗
 る其の應用の妙を得たり曾て一童子に向て已れと對坐せしめしに
 少しも方法を用ゐずして童子の某氏の心力を感受し稍々恍惚たる
 の状を呈せしに某氏の傍らより小石を取り童子は此五錢の白
 銅貨と汝の持てる一錢の銅貨と交換せすやと云ひまに童子は稍や
 暫く之を見較へたるのち交換すへまを已れの持てる銅貨を某氏に
 渡し小石を白銅貨と信して之を受け丁寧に之を懷中に收めたり氏
 又一枚の白紙を持ち來り童子は汝の當年二年三ヶ月なり之に何な
 りと記載せよと云ひしに童子は書くこと克はずと云ひまは氏は
 然らば汝の當年十五歳なり月落烏啼と書けよと云ひしに彼は美事
 に之を認めたり氏又更に一葉を取り出し汝の當年七歳なり之に月
 落烏啼と書けよと云ひしに童子筆とりて之を書せり然れども之を

前のものに比すれば遙かに劣りて全く頑是なき小兒の書せるもの
 如くなりし茲に於て氏の童子に向ひ拍手せまに童子の始めて我
 に回りしも先に銅貨と白銅貨と交換せしこと少き之を記憶せ
 たりし
 又某氏の(山形縣人あり)種々に本術を研究し大に其の妙を極めたり
 し加單に心力作用のみによりて人を制せんことを試験せまに未だ
 好結果を得ずと雖も犬及び小兒等(生れて百五十日を経過せしも
 の)略し心力作用により隨意に行動せしめ得るに至りしと
 又某氏の試験せし所によれり魔術の始め施術せま人の外に何人
 も被術者を去て自由に行動せしむること克はず故に施術者以外の
 人に去て被術者をして自由に行動せしめんとする時の施術者の承
 諾を得ざるへからす即ち施術者が心力を其人に移轉せしめたる後

に知らされり局外者の意思に因りて被術者を制する事能はざるも
 りと是れ實に然るべき道理にして一言に之を説明すれり被術者の
 心身の施術者の心に連繋せること其間に電線を張れるか如し故に
 若し施術者以外の人にして被術者を行動せしめんとするもの先づ
 其の電線を局外者に轉繋せしめざるへからざるか如し故に一たひ
 施術者の心許を得れば之を運動せしめ得ること少しも施術者と異
 ならずとなし

夢及奇夢

單に夢といへん睡眠中に生起する所の一種の精神作用にして平生深く思爲すること又の醒時思爲し及び見聞せし事柄の睡眠時に方り不規則に斷續して頻々腦裏に往來するものにして忽にして起り忽に去て滅去其狀の千態万様にして變化窮りなきこと實に想像も及のざるものあり之を要するに夢の斯の如く斷續不整なるの全く心性の注意力を欠くか或の僅かに注意力の存在するに由るものからん茲を以て醒時に於て一の事柄を想像するも必ず初めより終りに至るまで順序整然と去て前後不揃なるか如きことなしと雖も夢に在ての其の思考する所想像する所多くの首尾不整にして次第あることなし是れ即ち前に云へる注意作用の欠亡せる爲めに心性作用の思想の聯合せるまゝに種々雜多の事柄に想到し其の想像を以て直ちに事實とあすに

よるものあり故に忽ちにして春園に咲き乱れたる花を見ると思へん又忽ちに天空に飛揚することあり或の海洋に航し或の未だ知らざるの國に到る何そ其の現象の奇あして且つ怪ある是れ他を想像を以て事實と誤り其の想像の又前後不整極めて錯雜せるものあり之を例ふるに彼の小兒の遊技に行ふ字繼と稱するものに異なることなし字繼といはれ始めの一人先一字を書するときは他の兒童の其の文字の偏又のつくり依て種々の文字を書するものあり即ち一人先つ林字を書するれに次に林字の木に公を配して松字を造るか如く順次變轉して種々の文字を書するを云ふ夢の現象の殆んど之に異なることなし夢の斯の如く不規則にして繼續不定あるものありと雖も時として終始順序正しきことありこの固より希有に属するものあり何人の夢も多くの不整不規則あるものにて去て雲を掴むか如きを常とす人の其

の性質に由て平素一事物を思考するにも思想の動作整然として其の順序の乱れざるものあり又思想散漫錯雜して忽ち或る事物に就て思考するかと思はれは又忽ち思想の他に移りて更に起結の整はざるありされは睡眠時の想像即ち夢に在ても多少人々の性質に由て順序正しきも有り又否らざるもあるへし

夢の實に不規則ある想像の如し然れどもその想像なることを忘れて之を事實なりと誤認せるものあり恰も彼の鏡面に對へる人か其の影像の自己の反射物たることを忘れて鏡後に人ありとあすみ異らす夢の前述せる如く睡眠中に起る思想の作用あり故に全く腦髓作用の休止して眞に熟睡せる時に決して夢を結ふことあしされり夢の腦髓作用の半の休止したる所謂半睡半醒の境に之を結ふものにしてこの不完全ある心性作用の平素心内に潜伏せる思想の浮動するによる

ものありといへども其の浮動の時として外來の刺戟に促されて之を發することあり例之の睡眠に當て耳邊一羽の游蜂飛揚するもせんか其の羽音の忽ち聽神經を刺戟して人をして半睡の境に誘ひ來り半睡半醒恍惚の思想の人をして終に之を一種の音楽と誤るに至り曾て音楽をさう志事を想起し夫れより種々の思想聯合して茲に始で一種の夢を結ふ其他枕邊を人の歩行するときに地震を夢み枕を外して溪壑より墜落するを夢む等皆外來の刺戟に誘起して起るものあり彼の梅園に散歩せる夢の端なくも鶯聲に破られたる如き實の初め鶯聲を聽きて睡中の思想か梅園を想到せるによるものあり

中村勝之助と云へる學生曾て熟睡せるとき其の友人か手燭を持って室内に入り來りしに中村が頻りに煩悶の狀を見て之を呼び起せしに驚き醒て出火して室内火焰に閉ぢられしを以て如何に逃出んと

するも出ることを克ひさりし所を呼び起されしと云ひしことあり
これ獨り睡眠中とのみ事實と誤想するのみにあらずして現にニカラ
ギエウリ民族及びヒツエツター民族中に往々醒覺せる後に於ても尙夢
中のことを事實ありと誤信し靈魂か或他の世界に出遊せりと信する
ものあり今日の社會にハ斯の如きことを信するものあしと雖も尙或
る宗教上に行はるゝ鎮魂術と稱するもの頗る之に類するものあり
即ち人を或る方法に由て恍惚半睡の境に誘き其の精心作用の全く不
充分なる際に種々の咒文祝詞等の如きものを讀み聽せ然るのち其の
顔面に水を注ぎ又ハ大聲を以てその耳邊に姓名を呼ぶ等漸次精神の
回復を謀り而してその全く醒覺して精神平常に復したるときその方
式中如何ありしやを問ふときハ尊き神か咒文祝詞を讀み聞せ且つ遠
く微らに己れの姓名を呼へり誠に尊き事なり等の事を以て答ふと云

ふか如き皆睡中に想到せることを醒覺後も尙事實なりと信するもの
なり
睡眠中も想到せる事柄を事實となせることに於て更ハ奇あるあどあ
り是れ全く之を信するの深く且つ甚しきに由るものにして睡眠中に
突然として起立歩行し或ハ種々の談話をあす等は是れなり夜行又ハ夢
行と云ふ是れ亦睡眠中に起る想動作用に外ならず

千七百五十年頃の事ありしとか英國の海軍士官某と云へるもの其
の睡眠中他の艦船が入港して祝砲を放ちし聲をきき突然起立して
甲板上へ出て号令を發して兵士を指揮するの狀をなすより一船大
に驚き是れ必ず發狂ならんとして種々介抱せしも士官ハ中々に之を
きき入れず種々戰備をなすもの如くなりしか誤て跪き倒れ始め
てその夢を醒またりと

紳士某君一日從者を伴ひ蓮光寺の近傍に獵せまか終日一の獲物を
 さより從者と共に路傍の木の根に腰掛け休息せまか從者の終日の
 疲勞にや頻りに睡境に入るか如し紳士戯に其耳に口寄せて狐來れ
 りと云ふとさよやまに從者の忽ち起立して馳せ出さんとせしとき
 傍にありし獵犬の一聲高く吼るに驚きて夢を破れりと
 斯の如き夢の外亦尙一種の夢あり之を奇夢と云ふ是れ其の夢みし事
 柄か未來の事實の前兆とあり或る他の事實と符合せるものに
 して世俗に云ふ靈夢又の夢感の類即ち是れありこの奇夢の實の夢と
 稱せべきものにあらずと雖とも其の現象の相類似せるより常に之を
 夢と云ふ
 奇夢即ち靈夢なるもの前に云へる如く或る事實の豫言とあり又前
 兆となるものにてて例せり友人の來るを夢みて其の翌日友人の訪問

に逢へるか如き又立身出世すると夢みて顯要の職に上るか如き凡て
 夢中の事柄の醒覺後の豫言前兆とあるものにてて尋常の夢の前後不
 揃に且つ散漫錯雜せるものと全く相反したるものなり又時として
 同一の夢を再三再四夢みることあり
 奇夢と尋常の夢との其の性質固より同しからず奇夢の睡眠無我の時
 に當て或る事實を感得收受し其の感得に由て心内に浮へる現象を事
 實ありとするこの尋常の夢と異なることなしと雖も奇夢に在てり其
 の原因外より來り尋常の夢に在てりその原因多くの心内に存す假令
 時として外來の刺戟即ち音聲感觸等によることありと雖も是れ實の
 己れの思想を動かす所の誘因たるに過ぎずまて眞の原因の自己の腦
 髓にあり奇夢中に感得せるの己に總論の條に於て述べたる如く
 心力波動の作用によるものにてて即ち甲の心力を乙の腦中に波及感

傳えて現はるゝ所の者を事實なりと認むるによる感通の一方の精神作用休止せる時に當て一方の心力侵襲竄入するものにして其狀恰も電氣の兩極相吸引するか如きものあり而して此際への受感者の精神作用全く休止せざるへからず是れ奇夢靈夢の熟睡中に多き所以あり然れども心力波動の感傳の假令少許たりとも乗すへきの機あらひ忽ち之に侵襲すること猶空氣の眞空を侵すか如きを以て或は全く熟睡せざる時あつても心氣恍惚たる際の如きの時として他の心力に感ずることあり世人が多く談柄とする夢幻の間ひ誰某に邂逅せりと云ふか如きは恐くは斯の如き心力感受によるものならん之に由て之を見れば奇夢と尋常の夢との道理の上より云ふもろの性質の上より見るも全く別種のものたること論を俟たず即ち一の注意力に乏しき不規則ある精神作用にして其の原因内に存せし外來せ

る心力波動の刺戟衝動に由て之を感ず故に其の原因外に在るなり今左に此の二のものゝ異なる點を列擧すれば

夢の 睡醒の境に於て之を見る

奇夢の 熟睡無念の際に之を感ず

夢は 順序不整あり

奇夢は 順序整然たり

夢の 原因内にあり

奇夢の 原因外にあり

夢は 醒後の事實に關係あり

奇夢は 事實の前兆とあり豫言とある

夢と奇夢と相違せること前記の如き然るに其の現象の相類似せるを以て之を混同一視して區別することを知らず故に若し睡眠中心力の感

傳によりて奇夢に感ずることあるも偶然の符合なりとて之を安排するもの多し之に反して又世の妄信者の如き一たび奇夢に感ずることあればその奇夢の事實の前兆又の豫言とありて夢の全く事實の前兆とあるものと固信して其奇夢と夢との區別あることを知らず之を要するに甲乙兩不から睡眠中に起る所の相類似せる現象あるによりその原因の内にあると外にあると又その性質の同一なるや否に注意せずして單に之を夢と稱するに外ならず今之を區別すれ

奇夢 睡眠無我の際に他の心力波動に感して起る者

夢 睡眠時又の半睡眠時に自巳の心内に伏せし醒時又の五官の思考を誘起せし又種の思の誘起せし

夢 共に睡眠中に發起する者によりて其現象相類似せる混合誤認せるなり

之を譬ふれと一の鏡面に映せる自己の姿を以て誠の人とあすか如く一は己れの前に立てる眞の人を以て誠の人となすか如し一見それの同一なるか如く見ゆれども注意して之に對へ一は幻影にして一は誠の人間なることを知るあと決して難からざるへし
伯爵某一日机に翹て坐す靜に戸を排し來るものあり之を見るに令嬢の茶を侑んとて入り來るものあり風姿漸く衰へて花容亦平日のものに似す綺羅猶重きに堪へざるか如き伯爵怪みて謂らく彼が同胞皆夭折して存するもの僅かに嬢のま然るに今其の狀貌の悄衰斯の如き恐く亦同胞を地下に慕ふものにあらざるかと其の去るに及んで目送して涙下るとき誤て其持てる所の茶器を落す驚き醒れば従者の類りに之を攪して電報の來れるを告るものなり嗚呼夢なりしかと披て之を見るに何る量らん令嬢の死を報するものなりし

とこは是れ伯爵か曾て漫遊して上海にありし時の客舎の奇夢なり
杉山某氏醫を以て業とす曾て其の従弟の病篤きに及ひ之を其の家
に診し更酣にして歸る半夜其の門を叩くものあり之を問ふに従弟
か死を告るの使者なり氏驚き覺れり方に是れ一場の夢ありし斯の
如きもの再三氏懐愴の情に堪へず終に夜を徹せ黎明頻りに門を叩
く開て之を尋ぬれば則ち従弟の死去を報するものにして其狀夢中
に見し所と少しも異なることおかりまど氏頗る奇話となし後之を其
の親戚某に語るに某も亦同夜同一の事ありしを以てせりと
友人高野氏余か奇夢を談するを以て告て曰く伊豆國君澤郡大仁村
に杉山と云へる舊家あり家傳に邸内某所に古金を埋めし所三ヶ所
あり若し家資凋零に際せり掘て以て産を助けよ然れども猥りに之
を人に語る勿れと且つ家の相續者にあらされはこの傳説を聞くこ

とを許さざりしと曾て其家財政の困難を來し頗る其の救濟の道に
苦みしことありしか其家に使ふ所の小童一日主人に向て昨夜夢に
老人あり我に告て曰く邸内云々の所に古金の埋没せるあり掘て以
て家資を助くへし之を掘るとき三尺三間三丈等三ある數に注意
せよと云へりとて頻りに其の發掘を勸む然れども主人固より斯の
如き家傳説に信を措かず且つ小童の語る所誠に一場の奇談たるを
以て之を一笑に付せまも頻りに小童の勸誘するより試に童の語る
所を發掘せしに三間にして終に一の古瓶を得之を檢するに豫言に
違ふすこの古瓶中に數多の古金銀を藏めありしとこの杉山氏の
高野氏の姻戚にして最も慥ある談話あり

斷食との動物の生活に必要な食料を全く謝断して而かも能く其の生命を保続するを云ふ獨り生命を保続するのとあらず心身の健康少しも平日に異ならず時として更に健康活潑の状態を顯はす一種奇怪なる現象を云ふ

この奇怪ある現象の生理學者の百回千回考究するとも蓋し其理を求め得ざる所にして一種の學者の試験や論究の到底徒勞に属するおらん何とあれば右にあるものを求むるに之を左に探ると一般其理法を異にせればなり故に之を探ること愈々深ければ之に遠かること愈々甚し

生理論者の生命保続に必要な栄養品の必ず之を他より輸入せざるべからずと云ひ何人も之を當然の説なりと信する所なれども斷食論の

れい今日の生理學者の云ふか如き所謂滋養食物の生命保続に必要なならずと云ふを以て此の両間全くその説の根據を異にす是れ現今の生理説に由りての斷食の到底解説せられざる所以なり故に斷食の如き奇怪なる事柄を解せんと欲せし從來自己か信する(即ち書籍に由て習ひ得たる一種の理論)所を捨て平心以て之を探究するにあらざればい恐く其の眞面に接すること能はざるへし色眼鏡を掛けて物を見るときの眼にふるふもの悉く同一の色に映して其物本來の色澤を知ること能はざるか如く生理上の色眼鏡を掛けて宇宙萬物の真相を窺ふ何と其の色性を誤るなきを得んや

動物の食物に由て其の生命を保続す種族を播殖するものあり即ち植物性官能に由て養液の製造循環及び滌潔の各作用を完くし因て以て身体の消耗を補給し體質の成育を助く故に補消に必要な一定の養

分を給せざるに終に全く體質を消削して斃るゝに至る是れ動物に向て其の營養に必要な養分を與へざるを得ざる所以なり有生物の獨り動物のみ然るに非ずして植物の如きも又其の生存に必要な水、炭酸、アンモニヤ等の如き養分の供給を要す故に有情非情に論ずる其の生活に必要なの食料を要するの動かしへからざるの理論なりと生理學者の専ら唱道する所なり

然れど吾人の生理學者の所謂食料(即ち營養食品にして身体營養に必要な養分を含有せる者)を用ふるにあらざれば生活し能はざるか一嚮の肉一片の麵包をも用ひずして生命を保續する斷食の如き希有の現象の暫く措き生理上に無滋養物となす所の或る種の菓物又ハ養分を含有すること少き菌類をのみ食して生存する種類のもの世に頗る多し單純の食物のみを以てハ生命を健全に保續し得ずとい生理

上の定論あり且つ又假令單純食品にあらすして二三の食料を混用するも山間田舎等の人種の用ふる所の食物の極めて淡泊無滋養あるものにして到底生理學上の營養食料の標準との比較すべきにあらす然れば斯の如く菓物を食し又ハ一二の粗悪品のみを食するものハ生理上より云へハ到底生活し能はざるべきものなるハ實際ハ全く之と反對の現象を呈し之を彼の滋養品を食するものに相比較するに却て其の健否相反するを見るのとならす心神の健全なる大に之に勝るものあり此の一事を以て考ふるも生理學上に云ふ所の食料ハ生命保續に果して必要なや否ハ知るへからす今生理學上必要にして攝取せざるへからすと云ふ所の滋養料を見るに一日の平均量ハ(但し歐洲人に就て檢せるものに據る)

水

六八〇〇〇^々

斷食

蛋白質	三四、五八〇
澱分及砂糖	一〇七、四六四
脂肪	二二、三四四
無機質	七、九八〇
合計量	八五二、三六八

以上記せる所の滋養分及び滋養の量を攝取せされの人類生活に不適ありとの計算より米佛澳等の諸國に於ての左記の割合を以て兵士に食物を給せり即ち前記各國の兵士か一日の食量の

蛋白質	三五、一一一
澱粉及砂糖	一五五、六八八
脂肪	一一、六三七
無機質	五、九四八

合計量 二〇八、三八四

生理學上の理論によれり人間の生活にの通常前記の滋養分を要するか如えと雖も斷食者の暫く措て論せず彼の僧侶か蕎麥又の菓實類のみの單食をちして能く生命を保續し常人よりも却て健康あるの誠に生理學上の大疑問なり今蕎麥中に含ひ所の成分を見るに

蕎麥

水	一三、〇〇 <small>々</small>
蛋白質	一五、二〇
脂肪	三、四〇
炭酸水素抱合量	六三、六〇
纖維質	一一、一〇
灰分	二、三〇

斷食

合計量	九九、六〇
粟	
水	一三、〇五
蛋白質	一三、〇四
脂肪	三、〇三
無窒素分	五七、四二
纖維質	一〇、四一
灰分	三、〇五
合計量	一〇〇、〇〇

以上記する所に由て之を見るに其中に含む所の物の實に僅少あるに其内より纖維質灰分等を減すれば滋養分の實に僅少となるへし況んや其内の滋養分の主なる蛋白質の如き植物性蛋白質なるを以て極め

て消化し難きものなるに於てを植物中に含有せる蛋白質の硬固なる纖維質を以て包圍せらるるを以て極めて消化し難きのみならず從て消化液の侵入を妨げ却て不消化物となることありとホフマン氏云へり植物食物中の蛋白質の其の不消化なるか爲めに殆んど其の半以上は不消化物となりて体外に排出するものあり故に植物食物のみを以て肉食滋養品中の蛋白質と相當する量を得んとするに其の倍量を食せざるへからず即ち百分の蛋白を得んに二百分を食せざるへからずと之に依て之を見れば斷食の其原因恐くは今日の生理學以外に存するからん

斷食にハ有期斷食と無期斷食あり有期斷食ハ一定の時日を期ス其間少まも食物を給せざるを云ふ長さハ四五十日短まも一週日に下ることもなし無期斷食ハ終身食物を用ひざるものにして只時々少量の水を

飲用し又ハ霞を喰ふと稱して新鮮の大氣を呼吸するに過ぎざるあり
共に是れ宗教上の迷信又ハ仙術と稱する一種の宗教的迷信に因て行
ふものなりと雖も其の結果ハ實に今日の生理學上大なる疑問あり嗚
呼此生理學進歩の道途に横はれる大疑問ハ如何に之を解釋し得るか
此の疑問の説明し得ると否トハ今日の生理學上大なる影響を及ぼす
ものと云ふへし
人の身体ハ其の心思の勢力に因て自由に之を製することを得るもの
にしてこの力ハ獨り四肢の運動的作用のみに止らずして其の組織機
能より生活状態をも改變するものなり即ち心力の如何に因て消耗營
養等の如き諸機能の變改を喚起するものにして是れ心力特殊の妙能
あり凡て心力ハ其の影響を身体に及ぼすことハ例之ハ怖ろしきもの
を見る時ハ大暑の時候にも肌膚の粟立するを覺え耻辱を蒙るとき

ハ極寒の候にも猶流汗の背を濕すことあると異なり故に其の心思如
何に因てハ病体を健康体となす祈禱符祝の如き又之に反して健康体
を病体とあす咒咀の如き隨意に之をあま得るハ必竟心力ハ身体組織
機能の改變作用を喚起するものにして日蓮の奇行キリスの靈驗等
の如きも皆人体に種々の變象を起せまに由る
一碗の水も之を乳汁かりと信して飲用すれば能く其の口腹を肥え一
盃の温湯も之を酒かりと信して傾くれハ其人をして陶然として無上
の愉快を感せしめしかも顔面紅を潮えて歩行せられハ醉歩蹣跚たり嗚
呼何ぞそれ奇怪なる然れども是れ眞に奇怪なるにあらざして彼の魔
術の試験又ハ催眠術を施したる際に屢々見る所にまで全く心力の身
体を制するの作用に外ならずなり人の心内に深思する所ハ外貌に
形はれ又深く豫期することハ身部の機能に影響を及ぼすことあるも

のあり是れ實に心身の相關する所にして必竟信力の作用に由て然るに外ならず。信力の妙機實に斯の如きされは人若し食物を用ひざるも能く生活し得るものなりとの事を充分に信するか或は又彼の生理上の所謂滋養物あるものを用ひざるも空氣又の水のみを以て能く生存に堪ふるものあることを深く心内に信するとき其の結果は必ず心身に一種の變化を起して彼の水を以て牛乳と同じく口腹を肥し温湯を傾けて酔を取ると同じく能く生命を保續して久きに涉ることを得へけん加之らず彼の斷食者を見るに朝起東方に向て新鮮の大氣を呼吸せむるか如きは亦大に肺臟の機能を助けて酸素富有の大氣を血中へ輸するを以て従て神經の機能を亢進するの効あるに於てをやこの方法を持續して休まされの肺臟の機能非常に増進して終に呼吸の機能のみを以て

克く生存し得るに至らん然れども信力の作用の實に斷食生活に必要ななるものにして此の一事は全く斷食ある奇異なる現象を喚起するの主動力ありと知るへま故に此他の宗教上に傳はれる咒文又の仙家に傳はれる秘術等の大概何の用をも爲すものにあらずして唯單に其の信力を強固からしむる爲めに行ふ一手段たるに過ぎざるへま。斷食の實に信力の作用に由るものなれば信力の固結強銳を要すること勿論なりと云へども之と共に食慾を絶ちて飲食嗜好の念を放棄するの方法を求めざるへからむ行者又の術者と稱する輩は斷食するを見るに山林に籠居して一切の人事を謝斷し専心讀經修練の外少しも餘念なく他に心思の移動するを防ぎて食慾及び他の五慾を忘るゝことを勉むるに注意せむるの實に斷食を習熟練磨するの初歩に属するものなりと雖も其理の讀書習字に熱心なる者か食事を忘れ圍碁に熱中

するの徒か日の暮るゝを知らざると一般心思を一方に注集して他へ移行するを防ぐに由る。此一種の生活の實驗ハ古來宗教信者等の屢々實行せしものにして其の目的ハ宗教上の迷信よりこの術を行へば通力を得て飛行自在に天空に翔遊する無限の快樂を得ると信じて之を行ふか或ハ又この斷食を以て天神靈物に對し誓約の證と爲す爲めに行ふものなり。然れども多くの是れ宗教上の一儀式として行ひたるものにしてこの風習ハ葬式に關する風習より發達したるものあらんとスペンサー氏ハ云へり然れどもかゝる風習ハ恐クハ其の原因一二に止まるにハあらざるへしスペンサー氏ハ野蠻人の食を得る克はすして饑餓し爲めに明活ある夢を起すことありて隨て夢を起して靈魂に會遇せんか爲めに故ちに食を斷つに至るへし現時四方の野蠻人が斷食を行ふ目的

ハ一に茲に在り也又云ふ死人に食物を供し尽したるか爲めに斷食を行ハざるを得ざるに至ることありて隨て斷食を以て死人に恭敬を表するの證と爲し終に宗教上の一儀式と爲すに至れるなり也然れども是等の説ハ恐クハ謬見たるを免れざるへま。ポルトン氏の説ク所に由ればマホミーに在てハ死人の近親ハ斷食せざるを得ざるの風習ありと氏ハ之に向て説をかきて曰く是れ始め葬式に多くの貨財を消費し止むを得ざるに出たる者の終に發達して宗教上の一儀式とありしものなり也此説も亦スペンサー氏の説と同じく一の謬見と云ふの外ハユカタノ民族及ヒヒブリュー人等の内にも死人の爲に斷食を行ふの風習あるを以て考れハ其の原因ハ兎も角も歐洲諸國に行はるゝ斷食の内ハ我國の精進と同一の目的に由て死人に供養せる宗教上の一儀式たるものあるへし

我國に在ても佛堂に參籠せるの徒か行ふ所の斷食の内には克己自制赤心を靈体お誓ふか如き状態のものなれども仙術と稱する一派の斷食の内に之と目的を異にせるなり

斷食の此の如く其の目的一ならずして或は宗教上の儀式習慣に由るものあり又自己の心力練習の目的に由るものもあれども共に有期又は無期に營養食料を斷絶するものにして其の理論の前に述べたるか如し説く所大に今日の學理に反したると雖も暫く記して確説の出るをまつ左に記する所の帝國大學に於て行ひし有期斷食の最近實驗記にして其の理論の如きは今尙諸家の研究中に属すと云ふ

十四日間斷食の試験

病氣により或は病人の志望により數日若くは數十日間斷食するも飢餓に至らず身體にも亦異常の徵候を生ぜざることあり右の病氣

の關係によりて然るや否やの醫學上の一問題にして此問題を研究するにハ勢ひ健康體の人に就て斷食の試験を行ひ大小便の分拆を始め呼吸體温脈度重量を檢査其生理上に及ぼす關係如何を究めたるの結果と前記病人の結果とを比較して然る後始めて判斷を下すの外おかるへし斷食の試験ハ先年獨逸伯林に於て二度ハ十一日間一度ハ六日間又佛國に於て三十日間之を行ひたるの外醫學上の研究としてハ是迄餘り聞かざる處あり本邦にても宗教信者の時に或ハ斷食するものあれども其人に就て別段醫學上の研究を遂げたることおかりしに近頃大澤醫科大學長の此研究を思ひ立ち成田不動おとに祈禱する斷食者を檢せしことありしも是とて充分の研究を爲し得ざる内今回始めて其志望の一端を達するを得たり

伊豆國韭山に鈴木範衛氏と呼へる人あり年頃三十六其性行頗る磊

落にして夙に佛教を信し時々鎌倉建長寺に遊ひ住職を師として禪學を學ひ或の座禪の業を遂げ或の數日間の斷食を行ふことあるのみならず平素人に語りて斷食の困難の事にあらず予の却て夫が爲め精神の愉快を覺ゆる旨語れり此事同地衛生會の議に上り遂に醫科大學長大澤氏に照會するに至りたり依て大澤氏及び隈川教授の生徒中の篤志者と共に此研究を遂んとし早速鈴木氏の上京を促し先づ其體格を検査せしに偶と密尿病の氣味あるより折角の計畫水泡に属せんとしたるか同氏も之を氣の毒に思ひ己に代らしむるに實弟安井次郎氏を以てしたり安井氏も亦兄の舉動に倣ひ時々食又の減食を行ひたることあり先年師範學校を卒業し今や同地學校に教員の職を奉せり氏の年三十三常人に立超へて其身體健康と云ふ程にあらねどさりとして又孱弱の質にあらす實兄に代りて其任に

當るとを盟ひたるにより大澤隈川の両氏も大に喜び本試験に先ち七月二十二日より同二十八日迄一週間半飢餓の試験を行ひたり即ち先づ二十二日同氏の體量を檢したるに十二貫百匁なりし爾後一週間の一日の食料として毎日蕎麥粉百グラム凡そ廿六匁六分餘宛を與へたるのみちり法が最終日に至るも身體に異常なく元氣亦活潑にして體量の僅かに四百目を減ま十一貫七百目となりたる迄なり依て愈々斷食の本試験に取掛らんとし奮の身體に復せしめんか爲め多量の食物を勧めたるも氏の剛情の性として容易に之を聽かず今日まで折角半飢餓に堪へ尙ほ引續き斷食の試験に應せんとするに際し多量の食物を食へば是迄養ひ來りたる身體を害するの恐れありとて如何に説き諭すも應せざるより遂に實兄の力を假りて漸く平常の食事に復せざることを承諾せしめたり依て翌二十九日より

八月六日迄の上等の脂を給し成るべく多量に食することを勧めたり而して同七日午前六時より愈々断食の本試験に取掛るに付き先づ體量を檢せしに十二貫四百目ありしか翌日の四時迄に三百四十四目を減し次の百九十目、百三十目、九十目、六十目と漸次減量して十四日目即ち試験の最終期日たる去る二十一日午前六時に十貫七百九十目となり最初より都合一貫六百十匁を減きたり尤も減し方の漸次少量に赴かずして前日六十目を減し翌日二百十匁を減きたるか如き事實もありたれ共右の其前日比較的に多量の水を飲みたるの結果ならんと云へり又脈度の最初六十八度より八十度の間を昇降し十四日目より五十度とあり體温の始めの三十七度にて終りの三十六度を示し焦衰の量の三百立法センチメートルありしと云ふ次に試験中の経過を述へんに同氏の毎朝早く起きて自ら井戸端に

出て釣瓶を以て冷水を酌み手拭を濕して身體を拭ふことを例とせり夫れより體操を爲し六時より十時頃迄の書見に餘念なく其後の手紙を認め或は看護人と碁を圍むと少しも疲勞の體なく無異に十四日を經過せり夜の大抵三十分許睡眠するのみにて期日中に夢しことハ僅に一度ありしと云へり特に驚くべきハ去る十八日(十二日目)退屈の餘り看護人と共に本郷春木座に到り芝居を見物し脇見もせずして熱心に俳優の巧拙を話し尙二十日の夜の寄席に赴きて落語を聴き大に喜び合へりとそ又其途中も歩行頗る正確にして却て看護人に先のことありたりと云ふ斯の如き有様あれば精神に異常あかりしの勿論同氏の自ら元氣平日に倍せる旨を話し居たれども身體の漸次瘦せ衰へ四日目よりの顔に皺を現はし遂に目凹み頬落ちたり之に反して力量の更に變りかく却て平日より増したる

ものゝ如し

試験中の晝夜詰切りの看護人(醫學生)を附し注意怠りなく水と氷の外は一切飲食を禁したるか一日目の水量七百八十立法センチメートル(凡そ四合三夕)を飲み四日目に至り氷五百グラムと水五百三十分立法センチメートルを用ひたり左れに芝居寄席おとに赴く時の看護人の豫め量り置きたる飲用水を携帶したるよしあり
更に進んで大小便の關係を聞くに試験前多量の大便を通したるも以後一回たも大便を催したることをかく只尿の初日八百八十立法センチメートル二日目八百立法センチメートルを通し十四日目に二百四十立法センチメートルとされり其尿の分拆の今回の試験に最も大切ある關係を有するものに去て之に依て始めて體內肉質血液の分解其他の影響を知るを得るものあり尿を容るゝ器の注意に

注意を加へて之を清潔に爲し尿を入れたる後の堅く其口を塞ぎて外氣に觸るゝことを避け且つ腐敗を防んか爲めに流水中に冷し置き一日丈の分量を合して之を分拆する事となし目下隈川氏の専ら其分拆に従事せり

断食後の體量と食慾の如何と云ふに去る二十一日の午前六時に至り十四日の断食を経過したるか別に著しき疲勞を見す尙ほ此後少く共一週間位の断食の繼續を得らるゝの見込あるを以て醫師の氏に向て種々繼續断食の事を勸告せたるも同氏の最初の約束の二週間にして余の精神も亦之を許したる以上の今更延期するを得ずとて之を拒みたり依て二十一日の朝より食物を興るとぞありたるか氏の自ら平生嗜好する處の蕎麥粉及蕎麥を食せんと言ひ出て醫師も亦其意を容れたるにより當日の蕎麥がさどもり一ツを食ひ翌日

の蒸籠蕎麥二ツ其他氷砂糖湯等を飲食したるよし尙其當時の醬油の加味しある汁を嗜み非常に喜んで食したりと云ふ而して體量の去る二十二日の午前六時即ち食事を始めし後一日間にて三百目を増し昨二十三日の更に五百目を加へ都合八百目を増加し身體も退々舊に復し昨日の如きの平日と變りなかりしよし又同氏の語る處によれぬ食事を始めたる後の毎夜睡眠し得らるるも夢を見ること多しと云へり

前記の實驗の余が所謂心力作用に由て起り去所の現象ありしや果して他る其の原因ありしやの知らずと雖も余が信する所の心力の作用によりても必ず之を成し得るを信するなり(前記事の二十六年八月二十四日掲載時事新報に出づ)

幻術の應用

今若し幻術を習熟練磨し其理法を應用して諸般講演々説の説明等を補助することをあすこと恰も幻燈を以て説明を補くるか如くせいの利益の益し幻燈を用ひるの比にあらざるならん特に幻術のものと心力活動の一現象あるを以て別に他の機械を要することなく極めて簡易に言語を以て説明し能はる所の事柄を知らしめ然かも深くその感情に銘することを得へざるならん然れどもこれ幻燈などの如く機械の使用を以て何人にも爲し得らるるものと異り極めて最初に於ての爲し難き心力習用ある一難事を練熟せされぬ此の目的を達し難し己にこの妙機を悟得せんか其の施行の自由自在にして彼の幻燈を使用するに甚しき徑庭あることなからん必竟うの困難と云ふも只實に困難と云ふのみにして決えて不能事と云ふにあらざるあり術者と被

術者にまて苟も心靈の存せん限りは必ず爲し得らるゝものなりと斷言するも不可なかるへし

今この術を應用して特に効力の現著あるへきの宗教家の説教に際しこの理法に由て聽者に因果應報の理を目撃せしめ或は佛薩の尊像を禮拜せしむるの一事ありこれ佛門最上の法旨より云へば極めて卑近にして見識に類するの誹を免れざるからんも要するに只幻術を以て幻燈に代用せしむるのみにしてその出現の幻像即ち佛薩の尊体なりなど云ふにあらす只これを用ひて聽者の心力を確め疑心を去るの一方法便に供せしめんと意に過ぎす即ちこれ由て聽者なる信徒か渴仰信心の念を加ふるに蓋し他の畫像木像等を禮拜するの比にあらざることを余の深く信する所なり天樂の音聞へ蓮華雨ふるの時恍惚の際に佛陀の尊体を拜せし誰か信心隨喜の感を起さざるものあら

んこれ余か幻術の應用の幻燈の應用に勝りて効益ありと云へる所以なり

宗教上のことゝ熱心を以て之を傳へ熱心を以て之を迎ふ即ち宗教上の説教にこの術の應用か他の演説々明の場合よりも特に便利なる位置に立てりと思爲する所にして現に府下品川の某寺に於て或る僧侶か幻術を以て極樂淨土の狀を目撃せしめて非常に信徒の信念を加へたるか如き其の一例なり

其他講義堂に於て教師か生徒に説明するにも通常一遍の畫圖等を以ての容易にその本旨を説き難きことあるものかり若し斯の如き場合にこれを應用し心のまゝに其の有様を目撃せしむるか如きも亦實に有益ある事柄あるへま或は救恤慈善の事業の爲めに義金を募集せる際の演説例せし震災に罹りて家屋潰倒し堤塘破壊して人畜壓死せる

の状を目のあたり現せしめは之を見るものゝ感情も單に筆舌繪畫の上
 上に於て之を見るよりも更に惻愷の情を感ずること深きあらん
 若し夫れ征清の我將士か堅氷を踏み朔風を凌ぎて勇戦奮闘の状砲雷
 轟き劔電閃きて天地も震動せん有機を現せしめり獨り將士遠征の勞
 を感ずること深きのみならず内にあるものを去て忠勇の感念を盛ん
 ならしむるの益あるに決して疑ふべからず
 夫れ人内に心思盛るる時に感官の誤迷を起して終に種々の幻影を
 見又幻聲を聴くことあるものなりこれ必竟精神作用の一方に旺偏し
 て内外の區別を忘失するに依りて起る幻影を以て眞正の事實と誤認
 するに外ならず假令に色眼鏡を掛けたるものか林園草木の染色せる
 に驚くか如き林園草木の赤きり林園草木の赤きにあらすして見る人
 の己の眼鏡の赤きにはる幻影を見るものなり其心己に先づ一種の影

に化し去りたるなり
 斯の如く自己の心裏に一種の思想盛るるか爲めに種々の幻像を見る
 こと世間にはこの類の事實を見る彼の精神病に罹りたるものか幻
 影を見幻聲を聴くか如き或は又或る場合に於て想像盛なるか爲に幻
 影を見るの類の如し然れども今之を應用して人を去て故らに 像を
 目撃せしめんとせり先づ其人をして方法に因て一種の想像を逞ふせ
 しめ而して外より之を誘ふことを勉めざるべからず恰も催眠術の施
 行に於て種々の暗示問を試るか如くするを要するなり例之に天上
 に音樂の聲か聴ゆるべからんといふ彼の所に如來の尊体の願はれ給ひ
 しからん能く目を覺開きて之を見よと云ふの類是れなり然して
 又或る場合に於て斯の如き試問を用ひすして只術者が己の心裏に
 或る事物を想像組織するのみを以て充分に被術者に感ずるまじもあ

るへしこれ實に心力感傳作用又因て起る一種の奇現象にして尤も機微ある心力感通の作用なり ●
 等しくこれ幻想あり然れども一の其の 想の起る原因内に存し一の其原因外に存す即ち甲の種々の原因例への恐怖愛戀憎惡等の如き心情の爲めに己れ自ら之を作為し乙のその然る所以の道理を應用して外よりその幻想を起さしむるにあり而して其の幻想を起さしむるに就ての種々ある妙機ハ數多度ハ練習して以て其の淵奥を知得するの他之を求るの道なきなり
 羽なくして天空に翔り舟なくして海洋を走るものハ魔術の妙處に在て聲にあきに音を聞き物なきに其の形を見せしむるものハ即ち幻術の本領なり然れども此二つのものに混交綜錯して其何れに屬するやを分ち難きことあり必竟魔術と云ひ幻術と云ふも固と皆心力靈機あるへし

の應用に外を以てして只其現象の程度と作用の趣に因て假に名けたる區別の記号に過ぎされハ之を一括して心力奇現象と名くるも亦可あるへし

上來記述せる所の千妖萬怪ハ凡て是れ靈活なる心氣感傳の作用に属す心氣の感應ハ固とより機微隱約あり故に其の機の觸るゝ所光明を放つへく靈焰を發すへし嗚呼心氣流行の妙機ハ到底普通一遍の理法を以てハ解すへからざるか

著者ハ世の妖怪を舉げて悉く之を心氣の作用に期せんとする者にあらずと雖ども世の妖怪と稱する者の中にハ實に心氣感應の作用に因て起る者少しとせず即ち此書中に記せる所の類凡て皆心氣感應の奇象に外ならず是れ固と心氣感通上自然の道理に依て然る者にして別に奇怪不思議と稱すへきにあらずと雖ども只幻想の希有に属するか故に見て以て妖怪とあすに過ぎざるあり假令如何なる微物の生滅も豈故なくして起る者ならんや必竟其道理なきか如き感ある者の未だ

其の道理を發見し得ざるに依る學者と云へる世の迷想者か其師家遺傳ある狭少偏僻の識見を以て強て宇宙の大觀を論破せんとするより種々の道理以外の事實の出現し來るあり何ぞ知ん彼等か信して道理となす所の者の終に是れ道理の一小部分に過ぎざる者なることを畏懼の念をもてる者か白衣の懸りたるを以ても幽鬼の來り襲ふか疑ふと同しく偏僻なる理法に附翬せられたる學者等ハ一種の迷想を以て宇宙を觀するか故に事々物々悉く皆妖怪不可思議の鬼相を呈し來るなり之を稱して心盲と云ふ又色眼鏡的學者と云ふなりタウ井ンの説に心醉せる者のマウ井ンの所説の外世上に道理あることを知らずキリストを信する者のキリストの説さし道理以外に眞理あることを知らざるなり世に此種の人多し孔子に附翬せられたる人釋迦に附翬せられたる人枚擧すれハ遑かかるへし各其の信する所に依て他を

排せんと勉めつゝあるなり恰も狐狸に魅せられたる者か山野に彷徨して金殿玉樓に遊ひたると思爲せるに異ならず讀者若し眞の宇宙の大觀を察し造化の真相を接せんと欲せば方に須く古來の學者等か主張せる偏僻なる色眼鏡的理法を脱却去りて虚心以て自然の妙趣を觀せざるへからず斯の如くにして後始て造化の妙趣に參する者と云ふへきあり是れ豈著者か奇言を放て讀者を驚さんとするか爲めあらんや讀者よ試に過去を追想せよ十六年より二十年以前にありて西洋學の新に輸入し來りし當時の世の人妖怪等のことを口する者なく偶々之を唱ふる者の舊習頑固を以て目せられ世の人の齡する所とあらざりしにあらすや爾來文物の進歩の日を逐て隆盛を極むるに至り七八年を經十二三年を經るに従ひ久まゝ世の中に影を隱えたりし妖怪の漸

く學者の口頭の上るに至り此妖怪説の終ひ今日公然として學者の研究するに至りし者果して何の理由に依るか二十年以前にの妖怪なかりしや否や

眞理の終古依然たり唯觀察する所の眼孔の大小を依りて或の之を廣く觀し或の之を狭きか如く思爲せるのみあり例之燈をとりて夜行するに始めの四邊何物も見ることなく全く黒幕を以て包まれたるか如きも歩を進むるに従ひ松の木立も現はれ路傍の石地蔵も現はれ終に川を認む橋あるを知るに至る即ち十二三年前にの七八年前より幾許か道理の廣きことを知り十二三年前より今日の又更に眞理の範圍廣きことを認め居るあり然れの今日學者か理法外ありとし無稽ありとして排斥せる所も亦恐くの異日の眞理にあらざるを恐るらんや眞理の版圖の尙廣漠たり豈今日僅に知られたる狭少なる理法

に安んじて他の事實を安排し過くへけんや讀者よ本編に記述せる所の著者が淺薄たる意見に過ぎず其理論の如き恐く常を得ざる者多からん然りと雖とも議論の當否ハ暫く論せず其の所載の事實をも歐洲學者の所説に合せざる者あるか故に妄誕無稽ありとして排斥することを止めよ亦恐くハ安排の誹を免れざるならん附て云ふ幻術の理法と云へるか此の冊子の題名に適するや否やハ著者自らも疑ひなき能はず適當の名を得ざるか爲めに書中一節の名を以て之に題せしのみなり其題名の如きハ讀者の名くる所に一任す請ふ之を諒せよ

幻術の理法 附神と幽霊終

明治廿七年十二月廿七日印刷

幻術の理法

明治廿七年十二月三十日發行

定價金十六錢

編纂者

近藤嘉三

印刷兼發行者

駒崎林三

發行兼賣捌所

東京神田區美土代町三丁目四番地
穎才新誌社
 東京神田區美土代町三丁目四番地



版權所有

關西專賣書林

柳原喜兵衛

同

大坂北久太郎町四丁目
 吉岡平助

關東專賣書林

大倉孫兵衛

九州專賣書林

東京日本橋區通一丁目
 積善館支店

福岡縣博多市中島町